

國文選卷五

4a  
810  
BB5



41777

教科書文庫

4  
810  
41-1930  
20000  
67113

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

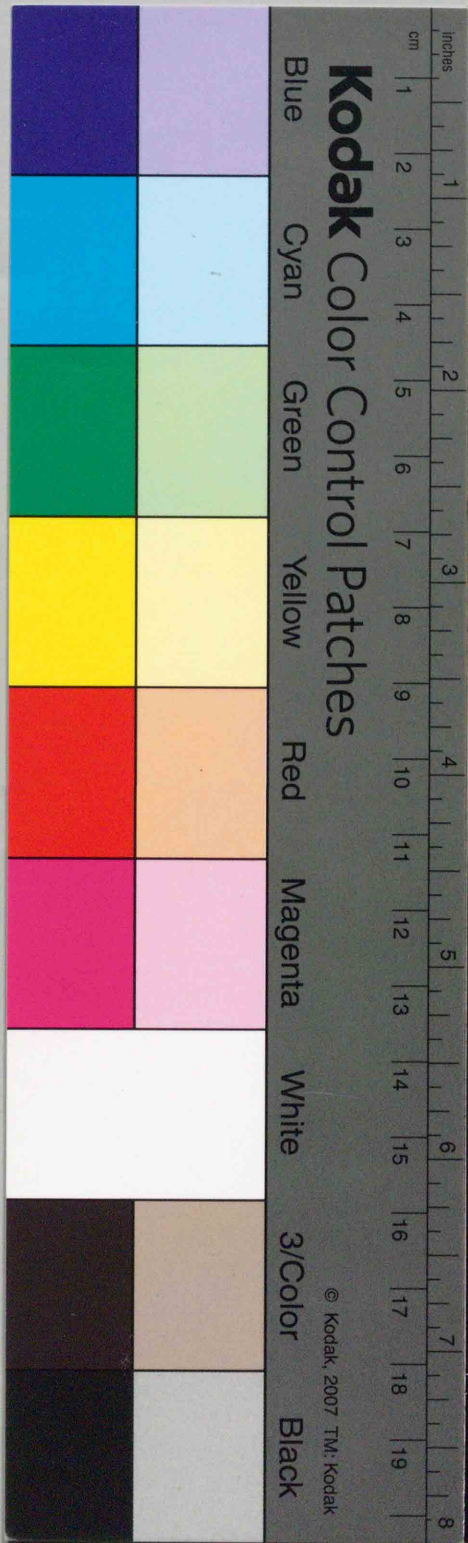


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





資料室

日八十二月一十年五和昭

濟定檢省部文

用科語國校學中

國  
文  
選



東京高等師範學校教授  
垣內松三編

42  
810  
985

國

文

選

東京市立第一高等女子学校  
国文部  
昭和二十三年

- 一 縦に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一	文章の道……………	島崎藤村……………	四
二	京の春……………	夏目漱石……………	一〇
三	汽車に乗りて……………	上田敏……………	三五
四	草鞋の紐……………	相馬御風……………	元
五	熊野落……………	(太平記)……………	五〇
六	おどろのした……………	(増鏡)……………	五九
七	鷺江の月明……………	佐藤春夫……………	六六
八	故郷の花……………	(平家物語)……………	七五
九	鴨越……………	(源平盛衰記)……………	七九

一〇	南歐の空……………	吉江喬松……………	七
一一	有王島下り……………	(平家物語)……………	九
一二	鹽原……………	尾崎紅葉……………	二〇
一三	公卿僉議……………	(平治物語)……………	二六
一四	鎮西八郎……………	(保元物語)……………	二四
一五	白峯の陵……………	土田秋成……………	三三
一六	擬古文抄……………	諸家……………	三六
一七	心の置處……………	山本有三……………	四二
一八	米國の半面……………	厨川白村……………	四七
一九	月雪花……………	芳賀矢一……………	五三

一 文章の道

一

十七八歳の頃、私はよく隅田川で泳いだことがある。全く水には経験の無かつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通つたうちに、向の河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更に又一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温かいとも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出来た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には、優に隅田川を往

隅田川 荒川の下流、東京府南葛飾郡隅田町の邊より下を稱す。

復した。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかなか容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人を見たりした時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違無い。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難く無いに相違無い。

二

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場處へ飛んで行く。射手の心に頼むところも無く、矢の曲直を

小諸 コモロ。長野縣北佐久郡の町。

辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場處に行くやうになつた。これは文章の道にも當筈めて見るこゝが出來る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、さうしても先づ自己から正してかゝらなければならぬ。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたこゝがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕し

一手 ヒトテ。的矢二筋を一組として數ふる單位。

て見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すこゝから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけるにつた。馬鈴薯の花の白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みつた。畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやう

になつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれた  
ことを、今でも能く思ひ出すことが出来る。われ／＼が文章  
の手本とすべきものは、何程われ／＼の周圍にあつても、そ  
れを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするに  
は、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。試みるこ  
いふことは、悟るといふことの初である。

四

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、  
私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初のうち  
は、無暗に手足を動かさし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前  
へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふや  
うに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、  
身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出来るやうに

新片町 東京市淺草區。  
淺草橋 淺草區茅町より日  
本橋區元柳町に架し、神  
田川に跨る橋。  
兩國橋 日本橋區元柳町よ  
り本所區元町に架し、隅  
田川に跨る橋。創架の當  
時、日本橋區の地は、江  
戸の一部として武藏國に  
屬し、本所區の地は下總  
國に屬したれば、兩國に  
跨るの意にて名づけた  
り。

なつた。向から大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突  
しないやうに、さう思つて漕いで行く樂みなども、それか  
ら起つて來た。その後船頭のするところを見るに、實にゆつ  
くりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。  
文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の  
表白とは成らない。

眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

(島崎藤村「飯倉だより」)

初稿考うたや

すみだ川（加藤千蔭）築波嶺の高根のみゆきかすみつゝすみだ河原に春たち

にけり（村田春海）

加藤千蔭 一六課参照。

島崎藤村 詩人・小説家。  
名は春樹。明治五年長野縣  
に生まる。明治學院の出身。

村田春海 一六課参照。



## 二 京の春

### 一 叡山登り

「随分遠いね。元來何處から登るのだ。」と、一人が手巾で額を拭きながら立留つた。

「何處か、己にも判然せんがね。何處から登つたつて同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから。」と、顔も體軀も四角に出來上がった男が無雜作に答へた。

「反を打つた中折帽の茶の廂の下から、深き眉を動かしながら見上げる頭の上には、微かなる春の空の底までも藍を漂はして、吹けば、搖ぐかき怪しまるゝ、ほご柔かき中に、屹然として、ごうする氣かき云はぬばかりに、叡山が聳えてゐる。恐ろしい頑固な山だなあ。」と四角な胸を突きだして、一寸

叡山 比叡山。京都・滋賀府縣界にあり、京都市の東北約一里。海拔八四八米。

屹然 キツペン。山の高き時つ貌。

櫻の杖に身をもたせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない。」と、今度は叡山を輕蔑したやうな事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ來て叡山が見えなくなつちや大變だ。」

「だから見えてるから好いぢやないか。餘計な事を云はずに歩いて居れば、自然と山の上へ出るさ。」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮ぎられて、菜の花を染出す春の強き日を受けぬ廣き額だけは、目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ。さあ早く行かう。」

相手は汗ばんだ額を思ふまゝ、春風に曝して、粘り着いた黒髪の逆さかに飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額を

頸窩 ボンノクボ。頸の中央の窪める部分。

も云はず、顔とも云はず、頸窩の盡くるあたりまで、苦茶々々に搔廻した、促された事には頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だ」と云つたね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云つたやうな按排ぢやないか。こんな風に、四角な肩をいゝ、四角にして、あいた方の手に榮螺の親類を作りながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう。」と、細長い眼の角から斜に相手を見おろした。

「さうさ。」

「あの山は動けるかい。」

「あは、又始つた。君は餘計な事を云ひに生まれて来た男だ。さあ行くぜ。」と、太い櫻の杖をひゆうと鳴らさぬばかりに、肩の上まで上げるや否や歩き出した。瘦せた男も手巾を

袂に収めて歩き出す。

「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端になるばかりだ。元來頂上まで何里あるのかい。」

「頂上まで一里半だ。」

「ここから。」

「ここから分かるものか。高の知れた京都の山だ。」

瘦せた男は何にも云はずに、にや／＼と笑つた。四角な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君のやうに計畫ばかりして一向實行しない男と旅行するご、ごもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいゝ、迷惑だ。」

「君のやうに無茶に飛出されても相手は迷惑だ。第一、人を連出して置きながら、何處から登つて何處を見て何處へお

山端 ヤマバナ。京都市の東北。八瀬村。

りるのか見當がつかんぢやないか。  
「なんの、これしきの事に計畫も何も入つたものか。高があるの山ぢやないか。」

「あの山でもいゝが、高さは何千尺だか知つてゐるかい。」

「知るものかね、そんな下らん事を。——君知つてゐるのか。」

「僕も知らんがね。」

「それ見るがいゝ。」

「何もそんなに威張らなくてもいゝ、君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとして、山の上で何を見物して何時間かゝる位は多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない。」

「進行しなければ遣りなほすだけだ。君のやうに餘計な事を考へてゐるうちには、何遍でも遣りなほしが出来るよ。」と、猶

さつさゝ行く。瘦せた男は無言の儘あとに後れて仕舞ふ。

春はものの匂になり易き京の町を、七條から一條まで横に貫いて、畑の柳の間から、温き水打つ白き布を、高野川の磧に數へ盡くして、長々北にうねる路を、大方は二里餘りも來たら、山は自ら左右に逼つて、脚下に奔る、潺湲の響も、折れるほごに、曲るほごに、あるはこなた、あるはかなた、と鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る雪に寒からうと、見上げる峰の裾を縫うて暗き陰に走る一條の路に、爪先上りなる向から大原女が來る、牛が來る。京の春は、牛の尿の盡きざるほごに長く且靜かである。

二 保津川下り  
浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。引返さぬは、山を貫いて丹波に抜ける。二人は丹波行の切符

高野川 タカノガハ。京都府愛宕郡大原村より發し南流して、京都市の北にて、賀茂川に合流す。

保津川 淀川の支流。京都府北桑田郡の山中に發し、曲折して龜岡に到り、東南流して桂川となり、遂に淀川に入る。

を買つて、龜岡に降りた。保津川の急湍は此の驛より下る。掟おきてである。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて碧油の趣をあはれなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生える。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

妙な舟だな。と宗近君が云ふ。底は一枚板の平らかに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を轉がして、二人はよきほどの間隔に座を占める。

左へ寄つて居やはつたら大丈夫ぞ。波はかゝりまへん。と船頭が云ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは、二間の竹竿、續く二人は右側に權、左に立つは同じく竿である。

ぎい／＼と權が鳴る。荒削りに平げたる櫂の頸筋を太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸味を持たせたのは、兩の手にむんづと握る便りである。握る手の節の隆きは、眞黒きは、松の

一六  
嵯峨 京都府葛野郡の町。  
龜岡 同南桑田郡の町。

小枝に青筋を立てて、うんと搔く力の脈を通はせたやうに見える。藤蔓に頸根を抑へられた權が、搔く毎に撓みでもする事か、強き頂を眞直ぐに立てたまゝ、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。權は一搔毎にぎい／＼と鳴る。

岸は二三度うねりを打つて、音なき水を、停る暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の蹙つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の忽ちに影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬はこれからである。愈、來たぜ。と宗近君は船頭の體を透かして、岩と岩の逼る間を半町の向に見る。水は、どうと鳴る。

成程。と、甲野さんが、舷から首を出した時、船ははや瀬の中に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。權

は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横たへたまゝである。傾いて矢の如く下る船はごゝご刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壊れるなご氣が附いた時は、もう走る瀬を脱けだしてゐた。

「あれだ。」と宗近君が指さす後を見るに、白い泡が一町ばかり逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を萬顆の珠ご我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ。」と宗近君は大に御意に入つた。

「夢窓國師ごごつちがい。」

「夢窓國師より此方の方がえらいやうだ。」

船頭は至極冷淡である。松を抱く巖の落ちんごして、落ちざるを苦にせぬやうに、權を動かし來り、棹を操り去る。通る瀬は様々に廻る。廻る毎に新なる山は當面に躍り出す。石山

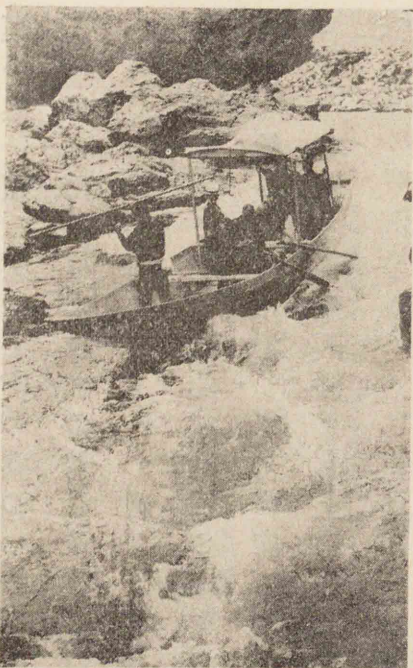
萬顆、バンクワ。顆はつぶ、その数の多きにいふ。

夢窓國師 禪僧疎石のこご。後醍醐天皇の知遇を辱す。正平六(二〇一)年寂す。年七十六。

當面 眞正面。

松山、雜木山ご數ふる。遑を行客に許さざる疾き流は、船を驅つて又奔湍に躍り込む。

大きな圓い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸



保津川下り

身に撃附けて散る水沫を、春寒く腰から浴びて、緑崩るゝ眞中に舟こそ來れご待つ。舟は矢も楫も物かは、一途に此の

水沫 ミナワ。水の泡の約。水泡。

大岩を目懸けて突きかゝる。渦捲いて去る水の、岩に裂かれたる向は見え、削られて坂ご落つる川底の深さは幾段か。乗る人のこなたよりは不可思議の波の行末である。岩に突

當つて碎けるか捲込まれて見えぬ彼方に、ごつご落ちて行くが。舟は只まごもに進む。

「當るぜ。」宗近君が腰を浮かした時、紫の大岩は早くも船頭の黒い頭を壓して突つ立つた。船頭は「うん。」と舳に氣合を入れた。舟は碎けるほどの勢に、波を呑む岩の太腹に潜り込む。横たへた竿は取直されて、肩より高く兩の手が揚る。共に、舟はぐうと廻つた。此の獸奴と突離す竿の先から、岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向へ落出でた。

「どうしても夢窓國師より上等だ。」宗近君は落ちながら云ふ。

急灘を落盡くす。向から空舟が上がつてくる。竿も使はねば、權は無論の事である。岩角に突張つた懸命の拳を収めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長々と谷間傳ひを根

金剛力 コンカウリキ。金剛力士(仁王)の力の如き大力。

限り戻舟を牽いて來る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難き岸邊を、石に飛び、岩に這うて、穿く草鞋のめりこむまで腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は、塞がれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏張る幾世の金剛力に、岩は自然と擦滅つて、引懸けて行く足の裏を安々と受ける段々もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱をわが勢に逆らはぬほどに疾く滑らす爲の策と云ふ。

「少しは穩かになつたね。」甲野さんは左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切つ立つた山の遙かの上に、鈍の音が丁と丁とする。黒い影は空高く動く。

「丸で猿だ。」宗近君は咽喉佛を突きだして峰を見上げた。

「慣れると何でもするもんだね。」相手も手を翳して見る。

「あれで一日働いて幾らになるんだらう。」

「幾らになるかな。」

「下から聞いて見ようか。」

「此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がないのべつに駛つてゐる。處々にかう云ふ場處がないと、やはりいかんね。」

「おれは、もつと駛りたい。どうも、さつきの岩の腹を突いて曲つた時なんか、實に愉快だつた。願はくは船頭の竿を借りて、おれが船を廻したかつた。」

「君が廻せば、今頃は御互に成佛してゐる時分だ。」

「なに、愉快だ。」

「自然は皆第一義で活動してゐるからな。」

「すると、自然は人間の御手本だね。」

「なに、人間が自然の御手本さ。」

「甲野さんは又言葉をつゞける。」

第一義 上つらでなく根本の意義。絶對の意義。



(保津川)

奔

湍

「瀬を下つて愉快だ云ふのは、御手本があるからさ。」

「おれにかい。」

「さうさ。」

「するとおれは第一義の人物だね。」

「瀬を下つてゐるうちは、第一義さ。」

「下つて仕舞へば凡人か、おやく。」

「瀬を下つて、自然に乘移るのだよ。」

「肝膽相照らす云ふのは、御互に第一義が活動するからだらう。」

「まづそんなものに違ない。」

「君に肝膽相照らす場合があるかい。」

甲野さんは默然として、舟の底を見詰めた。言ふものは知

肝膽相照らす カンタンア  
ヒテラス。互に心を示し  
て隠す處なき意。

言ふものは知らず 老子、



らず。」と昔老子が説いた事がある。

「はゝゝ、僕は保津川と肝膽相照らした譯だ。愉快々々。」と宗近君は二たび三たび手を敲く。茅之鏝

亂れ起る岩石を左右に縈る流は、抱くが如く、そこ割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、岩角をゆるりと越す。河は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山ぞす。」と長い竿を舷のうちへ挿込んだ船頭が云ふ。鳴る櫂に送られて深い淵を滑るやうに脱けだす。左右の岩が自ら開いて、舟は大悲閣の下に着いた。

原の里 (香川景樹)

召せや召せゆふげの妻木召せや召せかへるさとほし大

原の里 (香川景樹)

知者不言章第五十六に、「知者不言。言者不知。」老子、支那周代の人。姓は李。名は聃(タン)。老子二卷を著す。その終る處を知らず。

光琳波 クワウリンハ。畫家尾形光琳の描きたる畫風の波。

夏目漱石 小説家。江戸に生まる。名は金之助、東京帝國大學英文科の出身。大正五年歿す。年五十。

香川景樹 歌人。桂園と號す。鳥取の人。京都に住す。天保十四(二五〇三)年歿す。年七十六。

### 三 汽車に乗りて

赤松の林をあこに、

麻島ひだりに見つゝ、

汽車はいま堤にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、

河淀の近きは著し。

三稜草生ふる河原に、

葦切はけゝしと噪ぎ、

鶺鴒こそ夏は來らね、

たま〜に百舌の速贄、

籠鷺の何をか思ふ、

河淀 河水の淀んだまゝに流る。

三稜草 ミクリグサ。水邊に生ずる多年生の草。葉は細長く二三尺に達し、夏秋の候、葉間に三稜形の莖を出す。花は白色。

鶺鴒 クヰビ。はくてう(鶺鴒)の異名。

百舌の速贄 モズのハヤニヘ。百舌が蟲類なごを捕へ、木の枝などに貫きおくもの。

籠鷺 ヘラサギ。鳥類中、涉禽類の一種。形は通常のサギの如く、冠毛は無し。嘴の長さ五寸許り、嘴端は廣くして籠の如し。羽毛は暗灰色。

道祖神 ミチノササノヘノカミ

しよんぼりと立てる暇に、  
 紡績の宿にやあらん、  
 きりはたりはたり、ちやうちやう、  
 箴の音やゝにへだたり、  
 道祖神祭るあたりの  
 鐵道の踏切近く、  
 繩帶の襪褌の衣、  
 褐色は飾磨の染の  
 乳呑子を負へる少女は、  
 淺茅生の末黒に立ちて、  
 萬歳と囃し送りぬ。  
 萬歳はなれにこそあれ、

飾磨の染 シカマのソメ。  
 兵庫縣飾磨郡より産出す  
 る濃紺の染色。  
 淺茅生 アサチフ。茅のま  
 ばらに生えたるところ。  
 末黒 スグロ。春の焼野の  
 せのすゑの黒きこと。

幾年を生きよ、里の子。  
 人の世に尊きものは  
 土の香ぞ、國の御魂ぞ。  
 偽の市に住まへば、  
 産土の神に離りて、  
 養を缺きたる人も、  
 埴安の郷の土より  
 生えぬきのなれに呼ばれて、  
 本然の命にかへる。  
 道芝の上吹く風よ、  
 農人の寢覺に通ふ  
 微かなる土のおこづれ、

埴安 ハニヤス。埴安は、  
 もと地名なるも、こゝに  
 ては殆ど枕詞とも見るべ  
 き使方。  
 本然の命 ホンネンのイノ  
 チ。人間の本性として持  
 つ何の偽も飾もなき、あ  
 りのまゝの生命。  
 道芝 ミチシバ。道のほこ  
 りに生ずる芝。

なつかしき母の聲音か。  
晝さがり草の香高く、  
松脂のほひもまじる、  
地の胸の乳房のかをり、  
蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のほひす。

鳴神の落ちかゝるごこ、

汽車は今橋に轟く。

桁構へ眼路をかぎりて、

ひこり見る蛇籠の礫。

(上田 敏「上田敏詩集」)

蘇門答刺 ソモタラ。七種の香木の一。七種とは、伽羅(キヤラ)羅國(ラコク)眞那盤(マナバン)眞那伽(マナカ)佐曾羅(サソラ)寸茂陀羅(スマタラ)而して伽羅に新古の二種ありて七種なる。ソモタラはスマタラの訛。

上田 敏 文學博士。東京の人。東京帝國大學英文科の出身。東京高等師範學校・京都帝國大學教授に歴任。大正五年没す。年四十四。

### 四 草鞋の紐

出雲崎の橋屋では、良寛様の弟である主人由之夫妻を始め家内中の者が、久し振での良寛様の訪れを非常に喜びました。そして、それ風呂をたてろ、それ御馳走をしろといふ風に、主人が先に立つてもてなしに努めました。

良寛様は何よりも先づ風呂に入れて貰つて、幾日も幾日も垢によごれてゐた體を淨めてから、兩親を始め先祖代々の位牌の前に端坐して讀經をしました。そしてそれが済むと、始めてくつろいだ氣持になつて、主人の由之と對坐しました。

「まつたく、ごうも、久し振でした。こつちへは去年の夏以來初めてのことでせう。」かう由之から先づ口を切りました。

出雲崎 新潟縣三島郡の橋屋。出雲崎町の舊家。姓は山本。代々土地の名主と神官を勤む。良寛の生家。  
良寛 歌僧。俗名は山本榮藏。十八歳の時出家して良寛と稱す。歌人として名あり。天保二(二四九一)年没す。年七十五。  
由之 良寛の實弟。兄の出家後、家職を嗣ぐ。國學及び和歌をよくす。

良寛の句

禾と見れば

山ぼのりなる

五合庵

「さうならうかな。良寛様も感慨深さうに答へました。わしは、去年の秋木曾へ紅葉を見に行きました時、一寸庵へ立寄りましたが、折悪しくお留守でがっかりしました。あの時はあなたのお好きの石榴の實を持つて行きました、それを置いて來ましたが、あそこでおあがりになりましたか。あれは宅の庭の初なりをわざと持つて行つたのです。」

「さう、さう、そんな事もありましたないや、食べましたことも、食べましたことも。噛みつくやうにして食べました。それにあの時石榴の包紙に書いてあつたお前様の歌が、たいさう面白かつた。わしはまだそれを覚えてゐますぞ。」

ふるさとの初穂の木の實きこしめせよしや黒みて色かはるこも

なか／＼いゝ歌びや。わしはあの時も急に何だかお前様が

木曾 長野縣西筑摩郡の地。

庵 新潟縣西蒲原郡國上山なる五合庵と稱する小庵。良寛は當時茲に住居せり。

良元阿闍梨ト云々の事

良寛の句

山國上山をいふ。

懐かしうなつて、すぐにもこつちへやつて來ようかと思つたほごだつたが、折悪しく雨に降りこめられて、それも出來ずにしまひました。いや、全く永いこと逢ひませなんだな。」

「それにしても、今日はごこからでした。」

「ごこからでもない。山から來ました。いつになうこちらが懐かしうなりましたな。」

「さうですか。それはごうも……由之はしみ／＼した調子で答へました。」

二人の間には、暫く沈黙がつゞきました。良寛様も由之も深い物思に沈んでゐたのでした。が、やがて由之の方から口を開きました。

「これはしたり、お茶も出しませんで。ごうも……」  
かういつて由之は、慌てたやうに茶棚から茶器を取出し

山國上山をいふ。

て茶を入れました。

良寛様はごんなに喉が乾いてゐたのか、立てつゞけにもう一杯。もう一杯。五杯も茶を飲みました。

やがて燭臺の蠟燭に火がともされ、夕食の膳も運ばれて來ました。良寛様も由之も、二人が少しはいける口なので、妻のやす子は氣を利かして銚子を添へることを忘れませんでした。

何と云つても肉親の兄弟の間柄です。良寛様と由之との間は、酒のまはるにつれて次第にくつろいで行きました。

それはさうご、良寛様。暫くしてから由之は再び改つた調子で、かう云つてから話し出しました。

「周囲の事情から、家の借財も大分嵩みましたし、それに此のわしがこのまゝ、**名主役**を勤めてゐては、何かにつけて町

名主役 ナヌシヤク。江戸

もやかましいやうでもありませんので、いつそ此の際隱居した方が、家の爲にも、自分の爲にもよからうと思ひますので。」

「さうかな。良寛様の答はたゞそれだけでした。」

「それに、一つはわしもお前様の境遇がつくづく羨ましくなりましたのさ。無論到底お前様のやうに悟り切つた境界には到り得ないまでも、せめて自分の好きな國學と和歌の道にだけでも深く進んで行つて、少しは世間をも氣樂に渡れるやうになりたいと思ひまして……。」

「さうかな。良寛様は再び同じ返答をしました。」

「それにしても……。」由之が更に何事か云ひ足さうとして躊躇してゐた時、そこへ妻のやす子が給仕がてらに出て來ました。そして先程からの話はみんな聞いてゐたさういふやうな様子で、夫の話を取引つて云ひました。

幕府時代の江戸町役人の一。又江戸以外の幕府領内の諸村に於ける長。江戸以外の村内の威望あるものを以てこれに充つ。庄屋。

「あなた！そんなことよりも、何よりも此の間から云つて  
ゐた馬之助のこゝをお頼みしたら……」

「馬之助さんがどうかしたかな？良寛様はかうやす子の  
言葉に應じて、さういへば、さつきから馬之助さんの姿が一  
寸も見えぬやうだ。どこぞ旅にでも出られたかな。」

馬之助といふのは由之の長男で、今では一人前の若者に  
なつて、將來家職を繼ぐべく名主見習役をまで勤めてゐる  
のでした。良寛様は年少の頃からこの馬之助を大層可愛が  
つて來ました。又馬之助の方でも、伯父として以上に良寛様  
を慕うて來たのでした。

「いえ、良寛様、それどころではないのでござります。あれの  
爲には、わたしは毎日泣いて居ります。どうしてあのやうな  
放埒者になりましたやら。家の様子はお聞きなさいました

馬之助 由之の息子。

放埒 ハウラツ。ほしいま  
まにして心の赴くままに  
行動すること。

通りだん／＼苦しくなる一方なのに、旦那がこの通り自分  
の好きな道にばかり氣を取られてゐなざるし、それに馬之  
助が又……。かういひかけて、やす子は袖で目を拭ひました。  
良寛様はぢつと目を閉ぢて、やす子の話を聞いてゐまし  
た。

由之は何を思つたか、つと立ちあがつて部屋を出ました。  
夕波の音が近くに聞え出しました。

やす子が一通り家の窮状と馬之助の不身持とについて  
語り終つたところへ、再び由之が入つて來て元の座につき  
ました。

やす子は更に夫に向かつて云ひました。

「あなた、どうかあなたからもお頼みしてください。わたし  
はもう、此の上は良寛様から誠めていたゞかなければ、外に

道はないと思つてゐます。今も今までそれをお頼みしてゐました。」

しかし由之は何も答へずに腕を組んで考へ込んでゐるのでした。

「良寛様、どうぞ此のわたしを救つてくださると思つて、一つうんご馬之助に云つて聞かせてやつて下さい。あなたのお言葉なら、きつこあれの胸にも響きませう。」

やす子は重ねぐく泣くやうに頼むのでした。

しかし良寛様は相變らず目を閉ぢたまゝ無言でした。

やす子はとう／＼耐らなくなつて泣出してしまひました。

「いや、何も因縁ごごぢや。良寛様は始めてかう口を開いて、由之のさした盃をうけて、やす子の手から注がれた酒をぐ

つこ一息に飲みほしました。

「お山の櫻もそろ／＼散り加減でせうな。由之は話題を轉じようとするやうに、こんなことを云ひました。

「散り加減どころか、散る盛りぢや。今日もこつちへやつて来る途中、わしは到るところで花吹雪を浴びて來ました。」かう答へて、良寛様は重ねて一息に盃を飲みほしました。

その夜は、良寛様は懐ひ出の多い奥座敷に寝かして貰ひました。『第一節』

座敷の窓下がすぐ海で、春の夜の靜かな波の音が絶間なく聞えてゐました。

「昔ながらの波の音だ！良寛様はすぐにさう感じました。翌朝目がさめて起上がるこ、すぐに良寛様は窓の戸をあけました。」

朝日の光に照らされて海は輝いておりました。港内には僅か四五艘の荷積船の外に、あちこち散らばつた小さな蛸釣舟が十隻ほど、静かな波の上に浮かんでゐるだけでした。その蛸釣舟に、その舟に乗つてゐる魚叉を手にした漁師の、さも安らかさうな様子が、いかにもよく静かな春の朝の海と調和してゐるやうに見えました。

「何といふ安らかな様子だらう。あの人たちのやうな單純な、すなほな姿が、何よりも羨ましい。」

良寛様は、ふとそんな事を思ひました。見渡す限り、港内にも港外にも、波のうねり一つ見えず、海はまるで眠つてゐるやうに静かでした。右手の方に長く突出た岬の上に、高く彌彦の山が端麗な姿を現してゐました。海に向に横たはつてゐる佐渡の島山は、丁度夢の中で見る

魚叉 ヤス。長き柄の頭部に、鐵製の先端數本に分れて尖りたるものを取り附け、魚貝を捕ふるに用ふる器。銚(モリ)の類にして尖端銳利なり。

彌彦の山 新潟縣西蒲原郡の西部にある山。日本海に臨みて峙つてゐるため、眺望開豁に、加ふるに、山

山のやうに霞んでおりました。

「たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つるかな。」

嘗て詠んだ自分の歌を、いつとなしに良寛様は口ずさん

で見ました。

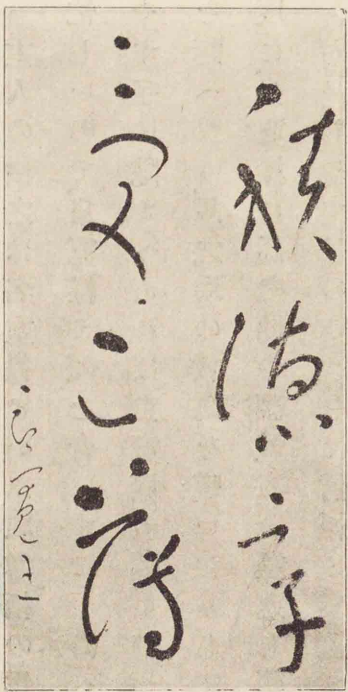
明日は歸ら

う明日は歸ら

うと思ひなが

らも、良寛様は

出雲崎の生家



良寛筆蹟

で、まる三日を暮してしまひました。その間に、先祖代々の墓處にも參詣したり、剃髮の寺である光照寺をも訪ねたり、又舊友の誰彼にも逢つたりしたいと思はぬ日とてはありま

容秀麗にして、古くより名山と稱せらる。海拔五八六米。  
たらちね 母の枕詞。  
母 良寛の母は佐渡相川町の橋屋山本庄兵衛の長女にして、名を秀子といふ。

ムナククケルコニシ 積徳厚受、己薄 良寛書

光照寺 出雲崎町尼瀨にあり。



せんでしたが、来たその日から目のあたり見せつけられた、  
みじめな生家の現状のうれはしさの爲に、三日間いふも  
のは一步も門の外へ足を踏出さずに過したのです。

うれはしさ 憂ふべきこと。  
歎かはしきこと。

主人の由之は名主役といふ職掌柄の爲に、晝間は何かこ  
忙しいので、良寛様と顔を合はすことさへ稀でしたが、妻の  
やす子は隙さへあれば良寛様の側にやつて来て、家の窮状  
を訴へたり、馬之助の放蕩を嘆いたりしました。そしてその  
度に、良寛様に馬之助の訓誡方を繰返し頼むのです。

しかし、やす子のさうした信頼と哀願とは、良寛様には此  
の上なく心苦しいことでした。自分には、それは到底不可能  
のことであり、又よし試み得たにしても、何の甲斐もないこ  
とであることは充分承知してゐながらも、悲みに悴れたやす  
子の切な哀願に逢ふと、やはり心を動かされずにゐられな

いこともあるのです。

馬之助もうす／＼さうした事のいきさつを感付いてゐ  
るらしく見えました。それは、以前あれほごまになつて  
ゐた良寛様が、しかも久し振でわが家に見えたのであるに  
も拘らず、馬之助の良寛様に對する素振のあまりによそよ  
そしいのでも、ほゞ窺はれるのです。

いきさつ 事の成行。経緯。

さすがに、良寛様が見えてからいふものは、馬之助は家  
にばかり閉籠つてゐました。しかし、一日のうちの多くの時  
間を、彼は二階の自分の部屋で過してゐて、やむを得ない用  
事でも命じられない限りは、決して良寛様の側に來ようこ  
もしませんでした。そればかりでなく、彼が良寛様の前に出  
る時の態度には、聊かの親みも寛ぎも見えないのです。  
それが更に良寛様を悲しくさせました。何となく濟まな

いやうな何かしら物怖ぢしてゐるやうな時にはどうにでもしてくれといつてゐるらしい捨鉢な心持さへ見えるやうな、さうした甥の様子を見るに、良寛様の心は一層暗くなるのでした。そして、幼い頃からあれほどまでに、此のわたしに馴染んでゐた此の甥が……さう思ふに、今の此の心の隔りが、良寛様には、時にはあさましくさへも感じられるのでした。

けれども又、一步深く馬之助の心に立入つて察して見るに、そこには憎むべき何ものも見出せないのです。

「馬之助だとして同じく苦しんでゐるに違ない。あれだとして決して自分の現在を是認してゐるのではない。たゞ、自分で自分をどうにもすることが出来ないのだ。苦みから遁れようとして、却つて苦みを重ねてゐるに過ぎないのだ。たゞ氣

の毒なだけだ。たゞ憐れむべきだけだ。」

さう思ふに、良寛様には馬之助に對しても何一言云ふことが出来なくなるのでした。まして他人を教へ諭すといふことにかけて、何の資格もないと思つてゐる自分を顧みるに、良寛様は一層深く自分のうちに閉籠つてしまふより外に道がないのでした。

長閑な日和が毎日續きました。身邊の波瀾は日々に高まるばかりでしたが、海は晝夜を分たず快く眠つてゐるやうに凪いでゐました。

出雲崎の港は相變らず船の出入が賑やかでした。入つて来る船があり、出て行く船があり、又泊つてゐる船がある。入つて来た船はやがて出て行く。出て行つた船はいつかは又入つて来る。泊つてゐる船だとして、いつまでも泊つてはゐるな

いさうした船の出入の有様を眺めてゐるだけにでも、良寛様の亂れた心は時々慰められるのでした。

「かうした靜かな春の海を眺めてゐるだけでも、大きな心の慰めが得られるのに、それにすら目をそむけてゐなければならぬ此の家の人達の、今の有様は何としましたことであらう。良寛様は時にこんなことを思つて、由之や、馬之助や、やす子の身の上を憐れがつたりしました。

しかし、それは結局どうにもならぬことでした。又どうして見ようもないことでした。三日の間いろ／＼に思ひ悩んだ果に、良寛様の心の奥から洩れでた考は、やはり此の「どうにもならぬ」といふ一語に盡きてゐました。氣の毒だ、あはれだと思ひつめればつめるほど、ますます／＼どうして見ようもなくばかりでした。やす子の心根を察したあまり、馬之

助に對して何か一言でも意見をして見ようかと思つても、結局何一言云ふべきことがなくなる外はないのでした。

「いつそ此のまゝ、何も云はずに山へ歸ることにしよう。」  
來てから五日目の朝、良寛様はさう／＼思ひ切つて暇を告げることにしました。  
第二節

やす子が泣くやうにしている／＼と引留めようと思ひましたけれども、良寛様は結局出かけることにしました。「それでは又近いうちに來てくだされ。これからは時候もよくなるばかりだから……。」と、由之も終に我を折つてしまひました。

それと見て取つて、やす子はあわてて馬之助を呼びに行きました。馬之助は相變らず二階の自分の部屋に引込んでゐるのでした。

まげてしまふ

やがて、やす子の後から馬之助が沈んだ顔をして梯子をおりて來ました。そして無言のまゝ、疊に手をついて顔を下げました。

「馬さん、ゆる／＼厄介になりました。お前様も達者でゐなされよ。良寛様は優しくかう云つて、ごうぢや、馬さん、そのうち一度遊山かた／＼わしの庵へ出かけて來て見たら。」と、馬之助の沈んだ氣を引立てでもするやうに云ひ足しました。

「はい。」と氣のないやうな返事をして、馬之助は又頭を下げました。

「わしのところでは、これいふもてなしも出來んが、山中で氣晴しになることもありますぞ。何か珍しい山の草でも摘んで來て、それで一杯やるのもまた格別なものぢや。」

馬さん、ゆる／＼厄介になりました。お前様も達者でゐなされよ。良寛様は優しくかう云つて、ごうぢや、馬さん、そのうち一度遊山かた／＼わしの庵へ出かけて來て見たら。」と、馬之助の沈んだ氣を引立てでもするやうに云ひ足しました。

それにもう半月もするに、筍が丁度食べ頃になる。良寛様は「ごきごき」も馬之助の氣を和らげてやりたいといふ風に、重ねてこんなことをさへ云つて誘ふのでした。

しかし、馬之助はたゞ「はい。はい。」と返事をするだけで、やはり深く沈み込んでばかりゐるのでした。

「良寛様、これにも是非そのうち一度伺はせませんが、あなたもごうか近いうちに、是非又來てください。大概いつ頃になつたら來ていたゞけますか。」馬之助の様子を見かねたやす子が、側からかう口添へしました。

しかし、その時は良寛様はもう土間におりて、草鞋を穿きにかゝつてゐました。

由之とやす子とは縁鼻近く坐つて、茫然とそれを見てゐました。馬之助は元の座を立ちもせず、依然として兩手を

疊についてうなだれておりました。

と、突然、良寛様は、

「馬さん、一寸来てくれんか。」と馬之助を呼びました。

やす子にはつこして居ずまゐを直しました。馬之助は呼ばれるまゝに黙つて立ちあがつて、良寛様の側まで行きま

した。

「すまんが、草鞋の紐を結んでくれんか。わしはごうしたものか、手が慄へて……。」と、良寛様は重ねて頼みました。

馬之助はやはり無言のまゝ、土間におり、身を屈めて良寛様の足に草鞋の紐をかけました。

馬之助が草鞋の紐を結び終らうとした時、その手の甲へ上から何やら濇い雫のやうなものがほこりと滴りました。馬之助は驚いて上を見上げました。その刹那、馬之助の目が

良寛様の目と出遇ひました。良寛様の目には涙が光つておりました。

良寛様はそのまゝ、黙つて出て行きました。

馬之助は土間にしやがんだまゝ、ぢつと良寛様の後姿を見送りました。馬之助の目にもいつしか涙が宿つてゐたのでした。  
(相馬御風の文による)

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれは住みわたるかも (良寛)

盃に散り來もみち葉みやびをの飲む盃に散り來もみち葉 (平賀元義)

羽ならず蜂あたゝかに見なさるゝ窓を埋めて咲くさうびかな (橋曙覽)

相馬御風 文學者。名は昌治。明治十六年新潟縣に生まる。早稻田大學文科出身。良寛の研究家として名あり。

平賀元義 歌人。岡山藩士。長治の子。弘化四(二五〇七)年郷里を出でて四方に流寓し、慶應元(二五二五)年歿す。年六十五。  
橋 曙覽 歌人。越前の人。田中大秀に従ひて學ぶ。明治元年歿す。年五十七。

五 熊野落

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞召されむ爲に暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが笠置の城既に落ちて主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば虎の尾を履むおそれ御身の上に迫りて天地廣しと雖も御身を隠さるべき處なく日月明かなりと雖も長夜に迷へる心地して晝は野原の草に隠れて露に臥す鶉の床に御涙を争ひ夜は孤村の辻にイみて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ何處ても御心安かるべき處なかりければかくても暫しはと思召されける所に一乗院の候人按察法眼好專いかにして聞きたりけむ五百餘騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける折ふし宮に付き奉りたる人一人もなかりければ一防ぎ

大塔宮 ダイタフノミヤ。護良親王のこと。大塔と稱するは延暦寺の座主におはせしめたり。  
 二品 ニホン。親王の位階。親王に賜ふ位は一品より四品までの四階なり。  
 笠置 京都府相樂郡加茂村の東一里にある山。山上の古寺を笠置寺といひ、後醍醐天皇の行在所たりし處なり。  
 南都 奈良のこと。京都の南にある舊都。  
 般若寺 ハンニヤジ。奈良市般若坂(今の奈良坂)の南にある律宗の寺。孝徳天皇の朝建立。  
 笠置の城既に落ちて 笠置の落城は元弘元(一九九一)年九月廿八日のことなり。  
 主上 後醍醐天皇。  
 虎の尾を履むおそれ 危険を冒すに喩ふ。  
 鶉の床 鶉の臥處。又いふせき床。こゝは後の意。

防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上透間もなく兵既に寺内に打入りたれば紛れて御出であるべき方もなし。さらばよし自害せむと思召して既に肌脱がせ給ひたりけるが事協はざらむ期に臨みて腹を切らむこゝはいと易かるべし。もしやと隠れて見ばやと思召し反して佛殿の方を御覽するに人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃はいまだ蓋を開けず。一つの櫃は御經を半ば過ぎ取出して蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうち御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經を引きかづきて隠形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。もし捜し出されなばやがて突立てむと思召して氷の如くなる刀を抜きて御腹にさし當て、兵こゝにこそ。といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中おし量るもなほ淺かるべし。

孤村の辻にイみて さびしき村にて進むべき路に迷ふ様子。  
 一乗院の候人 一乗院は奈良にあり、今廢す。候人は門跡家に使はるゝ家臣をいふ。  
 按察法眼好專 アセチホフゲンカウセン。傳未詳。  
 大般若 ダイハンニヤ。大般若經。大般若波羅密多經の略。六百卷。唐の玄奘三藏の譯。  
 唐櫃 カラウド。又はカラウヅ。脚ありて唐風に作りし櫃。衣服調度その他種々の物を入る。こゝにては經文を收めおく唐櫃。  
 隠形の呪 オンギャウのジユ。身を隠す呪文。

さるほごに、兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも、残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開けて見よ。さて、蓋したる櫃



太平記古刊本挿畫

二つを開けて御經を取出し、底を翻して見れば、ごもおはせず。蓋開きたる櫃は見るまでもなし。さて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命を繼が

せ給ひて、ぞおはしける。案の如く、兵ごもまた佛殿に立ちかへり、前に蓋の開きたるを見ざりつるが、覺束なし。さて、御經を皆打移して見けるが、からく、ご打笑ひて、大般若の櫃の中をよくく、搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。ご戯れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。

かくては、南都邊の御隱家も協ひ難ければ、乃ち般若寺を御出でありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御伴の衆には、光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊武藏坊村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人なり。宮を始め奉りて、御伴の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ざるを先達に作り立て、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もごより龍樓鳳

龍樓鳳閣 龍樓は東宮御所。鳳閣は皇居の門。皇居の意。



玄奘三藏 法相宗の名僧。唐の太宗の貞觀三年印度に遊び、十七年を経て長安に歸り、經論の翻譯に従事す。(西曆六〇二—六六四年)  
柿の衣 赤黒色、無紋の衣にして、山伏の服。  
笈 オヒ。負の義。山伏行脚僧などの旅行する時、佛具食物などをに入れて背に負うて行く物。  
頭巾 トキン。兜巾とも書く。布で作りし頭巾にて。修験者の冠るもの。後世には小さく作りて唯額上のみ置くことなる。

關の内に人ごならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて協はせ給はじと、御伴の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。

由良の湊を見渡せば、澳漕ぐ船の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

華軒香車 華美な車。  
 單皮 タビ。皮製の足袋。  
 脚巾 ハッキ。脚絆。  
 由良の湊 淡路の東岸にあり。  
 濱ゆふ 常緑多年生の草。高さ三四尺に達し、夏季白色の花を開く。南國の海岸に自生す。



藤代・和歌・吹上・玉津島 共に和歌山縣海草郡。雨を含める云々 唐の盧綸の詩に、  
 出關感暮一沾裳、滿野蓬生古戰場、孤村樹色昏殘雨、遠寺鐘聲帶夕陽。  
 切目の王子 キリへのワウシ。切目は切部にも作る。和歌山縣日高郡切目村。

その夜は、叢祠の露に御袖をかた敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、傳へ承る、兩所權現はこれ伊弉諾伊弉册の應作なり。わが君その苗裔として、いま朝日忽ちに浮雲のために隠されて冥闇たり。豈痛まざらむや、玄鑿むなしきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざむ。五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應なごかあらざらむと、神慮も暗に計られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御目睡ありける御夢に、鬢結ひた



伊弉諾・伊弉册の應作 諾册二尊が兩所權現となりてあらはれ給ひしなりとの意。  
 苗裔 ベウエイ。子孫。  
 冥闇 ミヤウアン。くらきこと。  
 玄鑿 ゲンカン。神佛の深遠なる照覽。  
 五體 一頭兩手兩足をいふ。又全身の意。  
 丹誠 赤誠と同じ。まごころ。  
 鬢 ビンヅラ。みづらりの音便。頭髮を頂より兩方に分けて、わがれて下げたる結ひ方。古代の男女の結髪の様なり。



る童子一人來て、熊野三山の間は、なほも人の心不和にして、大義成りがたし。これより十津河の方へ御渡り候ひて、時の到らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附け參らせられて候へば、御道指南仕るべく候。と申すに御覽ぜられ、御夢は即ち覺めにけり。これ權現の御告なりけり。頼もしく思召されければ、未明に御悅の奉幣をさげ、やがて十津河を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

その道のほご三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を敲て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍び、朽ちたる橋に肝を消す。山路もごより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁刀に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めたり。數日の間かゝる嶮難を経させ給へば、御身もくたびれ果てて、流る、汗水のごと

熊野三山 本宮・新宮・那智をいふ。本宮は即ち熊野權現にして、崇神天皇の朝に造營、那智は龜山天皇の朝に建立せらる。十津河 奈良縣吉野郡南部の廣大の地を、往時十津川郷と稱せり。吉野川の上流にして、今九箇村に分る。

山路もごより雨なく云々 唐の王維の、  
荆溪出白石、  
天寒紅葉稀、  
山路元無雨、  
空翠濕人衣、

の句による。空翠は山間樹木の茂りしために生ずる濕氣。  
萬仞の青壁云々 和漢朗詠集に大江澄明の作とし

て、  
山復山、  
何工削成青巖之形、  
水復水、  
誰家染出碧潭之色、

し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御伴の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆飢ゑ疲れて、はか／＼しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路のほご十三日に十津河へぞ著かせ給ひける。〔太平記〕

ゆふ雲雀芝生に落ちてこゑやめば山よりのぼる春の夜の月（契沖）

橋のかをれる宿のゆふぐれにふたこゑ啼きてゆくほととぎす（賀茂眞淵）

里遠みたどる野末のゆふぐれにしるべうれしく立つ煙かな（本居宣長）

ひゞき來る松のあらしに埋もれて絶間がちなる谷のみづおと（小澤蘆庵）

太平記 四十卷。花園天皇の朝より後村上天皇の朝に至る凡そ五十年間の戦亂のさまを記したる書。作者未詳。

契沖 國學者。大阪の人。俗姓下川氏。出家して契沖と稱す。元祿十四（二三六一）年寂す。年六十三。

賀茂眞淵 國學の大家。明和六（二四二九）年歿す。年七十三。

本居宣長 國學の大家。享和元（二四六一）年歿す。年七十二。

小澤蘆庵 歌人。名は玄中。享和元年歿す。年七十九。

六 おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日生まれさせ給ふ。文治元年三月二十五日御年六つにて位に即かせ給ひけり。御門いとおよすげてかしくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始めさせ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に法皇崩れさせ給ひし後は、御門ひとへに世を知ろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪秋津島の外まで流れ、繁き御惠筑波山の陰よりも

七條院 藤原殖子。修理大夫信隆の女。高倉天皇の妃。

治承四年 一八四〇年。  
文治元年 一八四五年。

およすげ 年よりもませてあること。

法皇 後白河法皇。

うつくし 愛すべきこと。可愛きこと。

書始 フミハジメ。童子の始めて書物を讀む儀式。

建久元年 一八五〇年。

あまねし 仰きわたりに一杯になること。

うつくし 慈愛。

秋津島 日本の異名。

深し。よろづの道々に明けくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かず知らず人の口にある中にも、

奥山のおどろのしたもふみわけて道ある世ぞ人に知らせむ

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いといみじくやむごごなくは侍れ。

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひておりぬ給ふ。御年十九位におはします事十四年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いこまだしかるべき御事なれども、よろづごころせき御ありさまよりは、なかくやすらかに、御幸など御心のまゝならむごにや。世を知ろしめす事は今もかはらねば、いこめでたし。

敷島の道 和歌の道。

おどろ 叢のしげりたる處。荆棘。

やむごごなし 常ならず貴し。

第一の皇子 土御門天皇。

またしかるべき 御讓位にはまだ御早いこと。

ごころせき 窮屈なる様。

なかく かへつて。

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ



給へど、猶また水無瀬といふ處に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばく通ひおはし宮まじつ、春秋の花紅葉につけ殿でも、御心ゆくかぎり世をひのかして、遊をのみぞし給ふ。處がらも、はるく川に臨める眺望、いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしも、とりわきてこそは。

見わたせば山もこかすむみなせ川ゆふべは秋に思ひけむ

白河殿 山城國愛宕郡にある離宮。  
水無瀬 攝津國三島郡島本村大字廣瀬。

心ゆくかぎり 思ふ存分に。  
世をひがして 世人を驚かすほど。

元久 土御門天皇の御宇。  
一八六四年。

萱葺の廊渡殿などはるく、艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おこされたる石のたゞまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げにくく千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家中納言いまだ下臈なりける時に奉られける、

あり經けむ本の千年にふりもせでわが君ちぎるみねのわか松  
君が世にせきいる、庭をゆく水の岩こす數は千世も見えけり

今の攝政は院の御時の關白基通のおこぎ、その後は後京極殿と聞え給ひし、いさ久しくおはしき。このおこぎはいみじき歌の聖にて、院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行

廊・渡殿 同じ物。本殿より釣殿・泉殿・對の屋等に通する廊をいふ。  
艶に 華やかに。  
をかしう 面白く。風流に。たゞまひ 据ゑ様。  
千世をこめたる 千年も榮ゆべき。  
霞の洞 仙人の栖處。轉じて、上皇の御所に申す。  
定家 藤原俊成の子。新古今・新勅撰集の撰者。仁治二(一九〇)年歿す。年八十。  
下臈 ゲラフ。官位の低きもの。

基通 近衛基實の子。  
後京極殿 九條兼實の子。名は良經。

はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびは  
におはしまし、かばにや、御製も見えざるを、當帝位の御  
ほごに、また集めさせ給ふ。土御門の内のおまゝの二郎君右  
衛門督通具といふ人を始にて、有家の三位、定家の中將、家隆、  
雅經などに宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。  
おのゝ奉れる歌を、院の御前にて自らみがきこゝのへさ  
せ給ふさま、いと珍らしく面白し。この時も、先に聞えつる攝  
政殿とりもちて行はせ給ふ。

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せせさせ給ひしに  
も、勝れたる限りを撰ばせ給ひて、その道の聖達判じけるに、  
やがて院も加らせ給ひながら、猶このなみには立ちおよび  
難しと卑下せさせ給ひて、判のこまばを記されず、御歌にて  
勝り劣れる志ばかりをあらはし給へり。なかゝいこ艶に

文治の頃 文治三（一八四  
七）年、藤原俊成千載集  
を撰す。  
きびは 幼少なること。  
土御門の内のおまゝ 源通  
親。  
有家 藤原重家の子。  
家隆 藤原光隆の子。  
雅經 藤原頼經の子。

撰集 こゝにては新古今  
集。

なみ列。同じ列。

判のこまば 批評の言葉。

侍りけり。上のその道をえ給へれば、下も自ら時を知るなら  
ひにや、男も女も、この御代にあたりてよき歌よみ多く聞え  
侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊  
房の左のおまゝ聞えし人の御末なれば、はやうはあて人  
なれど、つかさ淺くてうちつゞき四位ばかりにて失せにし  
人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心  
ばへをのみよみしこそ、いと有り難く侍りけれ。この千五百  
番の歌合せの時、院の上宣ふやう、こたみは皆世にゆりたる  
古き道のものごもなり。宮内卿はまだしかるべけれど、も、け  
しうはあらずと見ゆめればなむ、かまへてまるが面おこす  
ばかりよき歌仕うまつれ。と仰せらるゝに、面うち赤めて、涙  
ぐみて候ひけるけしき、限なきすきのほごもあはれにぞ見  
えける。さてその百首の歌、いづれもこりゝなる中に、

俊房 村上天皇の皇子、具  
平親王の孫。  
はやうは 以前は。  
あて人 貴人。  
失せに人 右京大夫源師  
光。  
そこひもなく 際限もな  
く。

ゆりたる 許されたる。名  
人さして許されたる。  
けしうはあらず 悪くはあ  
らず。  
かまへて 氣をつけて。  
面おこす 面目を立つ。

うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪  
のむらぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけ  
るほごをおし量りたる心ばへなご、まだしからむ人はいご  
思ひより難くや。この人年積るまであらましかば、げにいか  
ばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せに  
し、いごいごほしくあたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二  
年三月二十六日、竟宴といふこご、春日殿にて行はせ給ふ。い  
みじき世のひゞきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、  
院の御製、

石の上ふるきを今にならべこし昔のあごをまたた  
づねつゝ、

目に見えぬ云々 古今集の  
序に「力をも入れずして、  
天地を動かさし、目に見え  
ぬ鬼神をもあはれご思は  
せ、猛き武士の心をも慰  
むるは歌なり」  
あたらし 借し。  
竟宴 勅選集や書物の進講  
終りたる時に催す祝の宴  
會。  
春日殿 一條通の北にあ  
り。  
延喜の昔 古今集の選ばれ  
し時をいふ。  
おぼしよそへられて 思ひ  
あはせられて。  
石の上 イツのカミ。古に  
かゝる枕詞。

攝政殿

敷島ややまごこごばの海にして拾ひし玉はみがか  
れにけり

次々ずん流るめりしかご、さのみはうるさくてなむ。

かくて、院の上は、ごもすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひ  
て、琴笛の音につけ、花紅葉のをりくゝにふれて、よろづの遊  
びわざをのみ盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠  
によるづ世もつきすまじき御世の榮、次々今よりいご頼も  
しげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上  
人ごも召して、これかれ心のひきくゝに挑み争はせさせ給  
へば、あるは小弓、雙六などいふ事まで、思ひくゝに勝負をさ  
うごきあへるも、いごをかしう御覽じて、さまぐゝの興ある  
賭物かちものごもごうでさせ給ふごて、なにがしの中將を御使にて

攝政 藤原良經。

すん流る 順流るの意にし  
て、次々に次第に言出す  
意。

殿上人 テンジャウピト。  
清涼殿の殿上の間に候す  
るごを許されし人々、  
及び藏人にいふ。四位五  
位、並びに六位の藏人。  
ひき 心の好む方。  
さうごき 争ひ騒ぐ意。

さうで 取出での音便。

修明門院の御方へ、何にても、をのこごもに賜はずべき賭物。ご申させ給ひたるに、ごりあへず、小さき唐櫃の金物したるが、いと重やかなるを参らせられたり。この御使の人、何ならむと、いといぶかしくて、かたはしほのあけて見るに、錢なり。いと心得ずなりて、さご面うち赤めて、あさましと思へる氣色しるきを、院御覽じおこせて、朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より、殿上の賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今賭物と聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、古の事知り給へるこそいたきわざなれ。ごほゝゑみて宣ふに、さは悪しく思ひけり、心地騒ぎておぼゆべし。

修明門院 藤原重子。順徳天皇の御母。  
朝臣 アンソ。こゝにては人を親しみて呼べる語。  
いたきわざ 俗にえらいこといふに同じ意。  
上達部 カンダチメ。三位以上の人々。但し参議は四位なるもこの内に入る。  
大御酒 オホミキ。酒のこと。大も御も美稱なり。

夏の頃、水無瀬殿の釣殿にいでさせ給ひて、氷水めして、水飯やうのものなごわかき上達部殿上人ごもにたまはせて、大御酒まゐるついでにも、あはれ古の紫式部こそはいみじくはありけれ。かの源氏物語にも、「ちかき川の香魚、西川より奉れる石伏やうのもの御前にて調じて、書けるなむ、勝れてめでたきぞこよ。只今さやうの料理仕りてむや、なご宣ふを、秦のなにがしごかいふ御隨身、勾欄のものと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる小笹を少ししきて、白き米を洗ひて奉れり。ひろはば消えなむこにや。これもけしかるわざかな。さて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御土器たびく、聞しめす。何事もめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳をふごも飽く世あるまじかめり。〔増鏡〕

紫式部 藤原爲時の女。實名は傳はらず。藤原道長の頃の人。源氏物語の作者。歿年不詳。  
源氏物語 五十四帖。光源氏君父子を中心にして、當時の上流社會の有様を寫したる小説。この事は常夏の巻に見ゆ。  
西川 桂川をいふ。  
石伏 イシブシ。川魚の一種。  
御隨身 ミズキジン。身分ある人に官より付けらるる護衛の役。  
ひろはば云々 源氏物語帯木の巻に「ひろはば消えなむと見ゆる玉笹の上の笹」云々。  
けしかるわざ 變つたことの意味にして、ほめた言葉。  
かつく 衣を賜ふこと。  
増鏡 十卷。後鳥羽天皇の御代より後醍醐天皇の御代まで百五十年間のことを記したる歴史。作者未詳。

のつげも  
一  
徳王  
勇

七 鷺江の月明

集美學校からの歸途である。

「學校々舎の煉瓦をこゝに荷上げしたらしいと見える赤い粉のために、濱一面が赤いところへ出て、そこで待ちくたびれて、舟の中に晝寝してゐる舟人を起した。舟人は汀を指して不機嫌である。退汐の勢で歸らうと思つたのに、もう大分退いてしまつたからであらう。その罰と言ふわけでもあるまいが、逆風だからと言つて舟の日覆を剥がれた。併しもうぼつ／＼日影の薄れかゝつた太陽は、水の上ではそれほど堪へられなくもない。我々の船は逆風の中に帆を上げてまざりながら、厦門島の山陰を山に近く縫つて行つた。そのため幾分か時間がかゝつたけれども、私は決して退屈は

集美學校 厦門島の北端と相對する集美にある私立學校。

まざる 波間を切つて舟をやること。又側面より來る風を帆にうけて舟をやること。

厦門島 アモイタウ。支那福建省泉州府同安縣に屬する島。島の西南隅に厦門市街あり。

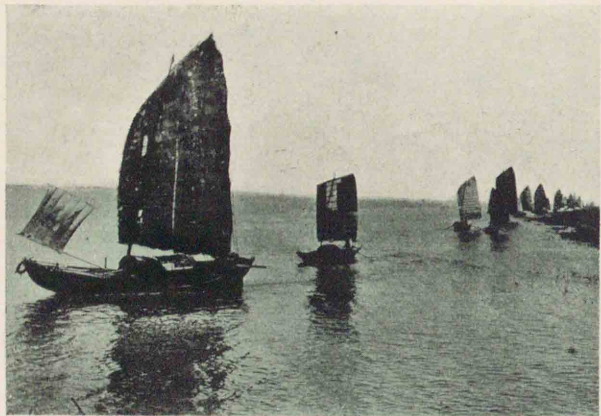
しなかつた。いや、退屈どころではない。私は私たちの小船を遅れさせて、水の上の夕暮を私に見せてくれたあの日の、あの徐かな逆風に感謝しなければならぬやうに思ふ。それほどその日の鷺江の夕暮は美しく楽しいものであつた。私はその夕方以來、支那の沿海地方では鷺江の風光が第一だといふ定評や、西湖もこれには及ばないと言つた人を信じようと思ふ。——西湖も、他のどの地方をも知らない私ではあるが、私自身に就いて言へば、私はあの日の夕方ほど、私の趣味にしつくり合つた自然を、その前にもその後にも、未だ一度も見たことはない。

水路を半分も來て、いくつもの小島が見え出すところへ來たころには、夕日は目に見えながら、ゆる／＼と西に暮き傾いた。西方の山々には、かすかな夕雲が煙のやうに消えて

鷺江 厦門島を圍める灣をいふ。  
西湖 支那湖南省懷德府永順縣にあり。風光の美を以て著名なり。

行くところであつた。羅を脱去つたこの幾重にも連なつた山々や、複雑に突入した鷺江の岸べの高低が、入日の光に濃い影を荷葉皺に刻んだが、やがて濃淡さまざまに、紫や、藍や、紺青や、黄や、赤金や、説きつくし難い色に幾重にも霞みながら、然もそれは刻々に、物憂く氣まぐれな氣分のやうに、捕捉しがたく變化した。——日脚が靜かに移つて行くがまゝに、我々の船がまだ搔亂さない水の行手には、金が溶けて流れた。水の上の金色が紅く變るところには、山々はその裾の方からごく少しづつ灰色になり、さて暗くなつて行く。日は落ちたが、餘映は虹の紅い部分のやうな茜で、空に残つてゐる。それもやがて薄れる。どういふ大氣の理由であるか、その夕榮が赤い天の川のやうに、一すぢに入日のあつた山の頂から遠く東へ流れてゐる。その夕榮の消えるところを尋ね

荷葉皺 カエフシウ。南宗派の畫法に於て、山の巖を描く一種の筆法。蓮の葉の筋に似たるより名づく。



帆 歸



て東の方を振返ると、ふとそこには低い山の僅に寸ばかり  
上に、かそけく淡い満月が大きくふわりと漂うて居るでは  
ないか。そのつゝ、まじやかに忘れられて居た月は、刻々に白  
さを増して來た。まだ光さは言へない白さである。その光の  
ない月の下、その我々の船に近い山裾の干汐したあたりには、  
一羽の白鷺が立つてゐる。この背の高い、多少の神韻を帯び  
た鳥を白く浮出させて、ほのかな夕闇は迫つてゐる。  
白鷺は俛れて佇んでゐたが、まだ黒く濡れて見える磯の  
上を一つ、つと啄むと、さて軽く飛びたつて、我々の小船の上  
をやゝ高く、併しその羽音をけはひに感ぜさせて横切つた  
が、直ぐ空に消去つた。濱にはたゞ加齢といふ灌木が黒く這  
つてゐる。この磯に沿うて、牡蠣を養殖するためとかで、そこ  
に無數に並べられた細長い切石は、廢址か何かのやうに佗

神韻 シンケン。氣高き趣。  
高尚なる趣。

加齢 カチャク。此の地方  
に生ずる一種の灌木。高  
さ三四尺。枝多く、葉繁  
く細かに、花は四瓣にし  
て黄と白との二種あり。

びしい。月の白さは靜かに光になつて來た。

「や、見給へ！」

鄭君が船の行手を指す。——一間ほどの黒いものが、まだ仄かに明るい水の面に、ほつかり小船の底のやうな形に、浮く。見れば沈み、沈んでは浮き、三度浮いて、さて見えなくなつた。

「見たか？」

「見た。何だらう、あれは。」

「神魚——白鰐。鄭君は私の懷中記事冊へ大きく書きながら、かう讀んだ。——白鰐は普通十呎以上ある。鷺江の到るところに、あのやうに形を見せるが、船が近づけば、ごんな小船にでも必ず姿を潜めて、古來一度も船を害つたことはない。それ故人々は神魚と呼んで感謝し尊敬してゐると言つた。

鄭君 廈門生れの青年。この行の案内者。

白鰐 魚類の一。身長二三米に達し、鱗なくして白色に見ゆ、水中に於て盛んに上下運動をなす。

——そんな説明は今どうでもいゝ、靜かに見給へ。月はだんだん眞珠の光になつて來た。月光の先づ浮かんたのは遠い

西の岸の小暗い山陰の漣漪の上であつた。さうして私の心は、譬へば月の光ごにも匂ひ出すといふ月來香の花のやうに、夕月ご夕月の統治する四邊の風景に魅了された。水上の薄暮は徐ろに迫つて、薄暗がりの中で、すべては哀婉で幽雅で、更に孤獨な白鷺や古怪な神魚によつて一味の凄異を脈打たせながら、無限の詩趣をおびて暮れなやんでゐる。しかも如何なる詩人の詩も、如何なる物語も、情趣の深さに於て、微妙な推移に於て、この自然——今日の鷺江の夕暮そのものに、ごうして及ぶものか。

廈門市街の一角が灰色に見えて來た。しかしそこに點された街の灯は、まだ暮れきらない大氣の中に空しくぼやけ

漣漪 レンイ。さざなみ。漣も漪もさざなみの意。

月來香 ゲツライカウ。廈門・廣東地方に産する蔓草。葉は柳の如く、高さ三尺餘に達す。秋季開花す。花の色は薄黄にして、筒形をなし瓣端は五裂す。夜更けて香高ければ此の名あり。

魅了 ミレウ。心をうばはるゝこと。

てゐる。これはターナーの構圖である。西岸の山陰に浮かんだ月光は、今はくつきりと豊かな銀箔になつて來た。ごこからの歸帆であらうか、西の方から私たちの路を遠く横ぎつて、厦門の路頭——船着場の方へ急ぐ舳艫がある。私たちの船人は帆を捲いて漕出した。幾艘かのジャンクの下を抜ける。厦門の市街の灯がもうかゞやかしう水にうつり始めて、月影は今から冷く降りそゞがうご用意してゐる。

「鄭君！私は一幅の繪の中に浮かび出したこの小舟の中で快活に言つた、今晚は、その何とかいふ藝人の音樂でも聴かうぢやないか。」——解つたつて解らなくなつて、こんな晩に聴かなければ、音樂を聴く晩は決して無いだらうから。」

〔南方紀行の文による〕

作者 佐藤春夫

ターナー 英國の水彩畫家。幼より畫才を顯はし、二十七歳にして帝室技藝員となる。(一七七五—一八五一年) William Turner.

ジャンク 戎克。支那人が沿海・河川等に於て、乗客・荷物の運送に使用する舟。 Junk.

### 八 故郷の花

薩摩守忠度は何處よりか歸られたりけむ、侍五騎、童一人、我が身共に混甲七騎取つて返し、五條三位俊成卿の許におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。忠度と名告り給へば、落人還り來れりて、その内騒ぎあへり。薩摩守急ぎ馬より飛んでおり、自ら高らかに申されけるは、これは三位殿に申すべき事ありて、忠度が參つて候、縦ひ門をば開けられずとも、この際まで立寄り給へ。申すべき事の候。と申されたりければ、俊成卿、その人ならば苦しかるまじ。開けて入れ申せ。とて、門を開けて對面ありけり。事の體何となう物あはれなり。薩摩守申されけるは、先年申し承つてより後は、ゆめ／＼疎略を存ぜずとは申しながら、この二三箇年は、京都の騒、國々

薩摩守忠度 平忠盛の子。和歌を藤原俊成に學ぶ。壽永三(一八四四)年戰歿す。年四十一。

混甲 ヒタカブト。一同揃ひて甲冑に身を固むること。又その人々。

俊成卿 藤原氏。歌人。皇太后宮大夫正三位に至る。元久元(一八六四)年歿す。年九十一。

先年云々 先年歌の道について教を受けて以來。ゆめ／＼ 決して。

の亂出で來、剩へ當家の身の上に罷りなつて候へば、常に参り寄る事も候はず。君既に帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はや盡きはて候。それにつき候うては、撰集の御沙汰



(筆三月形尾) 度 忠 平

あるべ  
平き由承  
つて候  
ひし程  
に生涯  
の面目  
に一首

なりとも御恩を蒙らうと存じ候ひつるにかゝる世の亂出で來て、その沙汰なく候條、唯一身の歎と存じ候。この後世静まつて撰集の御沙汰候はば、これに候卷物の中にさりぬべ

君 安德天皇。  
撰集の御沙汰 勅撰和歌集  
御撰定のこと。

さりぬべき 然るべき。

き歌候はば、一首なりとも御恩を蒙つて、草の蔭にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はむずれ。さて、日來詠み置かれたる歌ごもの中にて、秀歌と覺しきを百餘首書集められたりける卷物を、今はとて打立たれける時、これを取つて持たれたりけるを、鎧の引合せより取出でて俊成卿に奉らる。

三位これを開いて見給ひて、かゝる忘形見ごもを賜はり候上は、ゆめく、疎略を存ずまじう候。さて、唯今の御渡りこそ、情も深う哀も殊にすぐれて、感涙抑へ難うこそ候へ。こ宣へば、薩摩守骸を野山に曝さば、憂名を西海の波に流さば、流せ、今はうき世に思ひ置くことなし。さらば暇申す。さて、馬に打乗り甲の緒をしめて、西をさしてぞ歩ませ給ふ。三位後ろを遙かに見送つて立たれたれば、忠度の聲と覺しく、

鎧の引合せ 鎧の胸の  
後ろさを引締め合はす  
こと。

前途程遠馳思於雁山夕雲。高らかに口ずさみ給へば、俊成卿もいご哀に覺えて、涙を抑へて入り給ひぬ。

その後、世靜まつて千載集を撰せられけるに、忠度のありし有様言ひおきし言の葉、今更思ひ出でて哀なりけり。件の巻物の中にさりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勤の人なれば、名字をば顯されず、故郷花といふ題にてよまられたりける歌一首ぞ、讀人知らずとて入れられたる。

さびなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻

かな おぼろ 新まてととと ちかやうととと ちかやうととと  
その身朝敵となりぬる上は、仔細に及ばずといひながら、うらめしかりし事ごもなり。〔平家物語〕

ほととぎす平安城を筋かひに

蕪村

前途程遠云々 和漢朗詠集に後江相公(大江朝綱)の作として、  
前途程遠、  
馳思於雁山之暮雲。  
後會期遙、  
露纏於鴻臚之曉淚。  
雁山は支那の長安より胡地に越ゆる路に當る山。  
千載集 二十卷。藤原俊成、壽永三(一八四四)年二月に後白河上皇の勅を受けて、後鳥羽天皇の文治三(一八四七)年九月に撰進せるもの。  
勅勤 天子よりの告。  
さびなみや 志賀にかゝる枕詞。  
仔細に及ばず かれこれと申すべき筋なし。  
平家物語 十二卷。平家一門の興亡を敘せる歴史物語。作者は種々異説ありて詳かならず。異本多し。  
蕪村 俳人。本姓は谷口。與謝氏を稱す。攝津の人。天明三(一四四三)年歿す。年七十。又六十七ともいふ。

九 鶉 越

七日の曉、九郎義經は鷲尾を先陣として、一の谷の後ろ、鶉越へぞ向かひける。比は二月の初なり。霞の衣立てへだて、緑をそふる山の端に、白雲絶えなく聳えつゝ、先づ咲く花かこあやまたる。未だ歩みなれぬ山路なり、行末はそここ知らねごも、行く馬の足に任せつゝ、各、先に進みけり。夜も仄暗きほごなり、道にはなづみけれども、矢合せ時を定めれば、明るるを待つに及ばずして、谷に下り峯に登り、引懸け引懸け打ちけるに、一の谷の後ろに篠が谷といふ處に人の聲しければ、押寄せて「何者ぞ」と問ふ。名乗る事はなくて、散々に射ければ、此奴ばらは平家の雜兵にこそあるらめ。一々に搦め捕つて頸を切り、軍神に祭れ。とて、源氏も散々に射ければ、こゝ

七日 壽永三年二月。  
義經 源義朝の第九子。幼名牛若。後源九郎義經と名のる。兄頼朝を助けて、木曾義仲を亡ぼし、平家を追討したりしが、頼朝と隙ありて、文治五年、奥州衣川に歿す。年三十一。  
鷲尾 鷲尾庄司武久の子。幼名熊王。義經に従ひて三郎義久と名のり、鶉越の道案内をす。義經と共に衣川に戦死す。  
一の谷 神戸市須磨町。その北方に鶉越あり。  
矢合せ時 戦を始むるに際し、兩軍よりその合圖の矢を射出す時刻。

にて平家多く討たれにけり。  
 其の後鷲尾尋承にて下り上り打つほどに、辰の半ばに鶴  
 越一の谷の上鉢伏礮の途といふ處に打登る。兵共遙かに指  
 しのぞきて谷を見れば、軍陣には楯を並べ突き、士卒は矢束  
 をくつろげたり。前は海、後ろは山、波も嵐も音合はせ、左は須  
 磨、右は明石、月の光も優ならむ。追手の戦は半ばに見えたり。  
 喚き叫ぶ聲、射ちがふ鏑の音、山を穿ち谷を響かし、赤旗、赤符  
 立並べて、春風に靡く有様は、劫火の地を焼くらむも、かくや  
 と覺えたり。時既によくなりたり。大手に力を合はせむとて  
 見おろせば、實に上七八段は小石まじりの白砂なり。馬の足  
 停るべき様なし。徒步にても馬にても落すべき處にあらず。  
 さればとて、さてあるべき事ならねば、只今まで乗りたりけ  
 る大鹿毛には、佐藤三郎兵衛を乗せ、我が身は大夫といふ馬

尋承 ジンジョウ。案内す  
 ること。またその人。  
 打つ 馬に乗りて進み行く  
 こと。

矢束 ヤタバネ。籠などに  
 盛りたる矢をたばねおく  
 もの。

追手 オフテ。敵の城の正  
 面より向かふ本隊。又城  
 の表門。大手とも書く。  
 鏑 カブテ。鏑の元に附す  
 るもの。形無の根に似  
 て、木製中空なり。

劫火 ゴフクワ。佛説にい  
 ふ世界破滅の時、風・水・  
 火の三大災あり。その三  
 大災の一。

佐藤三郎兵衛 義經の臣。  
 名は繼信。屋島の戦に義  
 經に代つて死す。

に乗替へて、谷へ打向け給ひ、鹿の通ひ路は馬の馬場ぞ。各、落  
 せ落せ。と勧め給ふ。兵共我も我も馬をば谷へ引向けて、心  
 は先陣とはやれどもさすがいぶせき崖なれば、手綱を控へ  
 てためらへば、馬も恐れて退きけり。互に顔と顔を見合は  
 せて、いづくを落すべしとも見えず。  
 軍將宣ひけるは、一は馬の落様をも見、一は源平の占形な  
 るべし。とて、葦毛の馬に白覆輪、白ければ白旗に准へて源氏  
 とし、鹿毛の馬に黄覆輪、赤ければ赤旗に准へて平氏とて追  
 ひおろす。各、木の間にてこれを見る。上七八段は小石交りの  
 白砂なれば、まるぶともなく落つることもなく下りつゝ、巖の  
 上にぞ落著きたるや、暫くあつて、巖の上よりまるび下り、  
 平家の假屋の後ろに落付きて、源氏の馬は這起きつゝ、身振  
 ひして峯の方を守り、二聲嘶へ篠草はみて立ちたり。平家の

いぶせき 心結ばれて解け  
 ぶさるさま。氣のふさぐこ  
 こと。こゝにては恐ろし位  
 の意。

占形 ウラカタ。占に現れ  
 たる形。

葦毛 アシゲ。白き毛に、  
 黒などの毛の混じたる馬  
 の毛色。

白覆輪 シロフクリン。鞍  
 の前後の山形の上に細き  
 銀を伏せたもの。

カゲ 鹿の毛に似て茶色な  
 る馬の毛色。  
 黄覆輪 前々條の銀の代り  
 に金を用ひたるもの。金  
 覆輪。

馬は身を打損じ、臥して再び起きざりけり。城中にはこれを見て、敵の寄すればこそ鞍置馬は下るらめきて、驢ぎ迷ひける處に、御曹司は、源氏の占形こそめでたけれ。平家の軍様あるべし。人だに心得て落すならば、過更にあるまじ。落せ落せ。と宣へども、我だに恐れて落さねば、人も恐れてえ落さず。白旗五十旒ばかり梢に打立てて宣ひけるは、守つて時を移すべきにあらず。馬に乗るには、一に心、二に手綱、三に鞭、四に鐙、こいひて、四つの義あれども、所詮心を持ちて乗るものぞ。若き殿原は見も習へ乗りも習へ。義經が馬の立てやうを手本にせよ。とて、眞逆に引向け、續け、續け。と下知しつゝ、馬の尻足引敷かせて、流れ落ちに下したり。三千餘騎の兵共、大將軍に續けきて、白旗三十旒、城の内へ指覆ひ、轡並べて手綱かいくり、同じ様に尻足敷かせて、ささ落して壇の上にご落ちこご

尻足 後脚。

まる。

それより底を指しのぞいて見れば、巖石時つて苔蒸せり。刀の刃に草覆へる様なれば、いこいぶせき上、二十丈もやあらむと見え渡る。下へ落すべき様もなし。上人上がるべき便りもなし。互に固唾を呑みて思ひ煩へる處に、三浦の佐原十郎義連進み出でて、我等甲斐・信濃へ越えて、狩し鷹使ふ時は、兎一つ起きても鳥一つ立つても、傍輩に見落されじと思ふには、これに劣る處やある。義連先陣仕らむ。とて、手綱かい繰り、鐙踏張り、只一騎眞先かけて落す。御曹司これを見給ひて、義連討たすな。續け者共、者共。と下知して、我が身も續きて落されけり。

畠山は赤緘の鎧に、護田鳥毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛の馬の太く逞しきに乗りたりけり。此の馬鞭打に三日の月

三浦 今の神奈川縣三浦郡。

佐原十郎 頼朝の臣。義經に従ひて平氏を討つ。

畠山 名は重忠。武藏國の人。頼朝に重用せらる。

元久二(一八六五)年北條時政に憎まれて戦歿す。年四十二。

赤緘 アカチドリ。赤色の絲又は革にてなごしたる

護田鳥毛 ウスベウ。護水鳥とも書く。五位鸞に似たりといふ。其の羽の薄くして黒き處少きないふ。

栗毛 クリゲ。鬣と尾と赤褐色にて、他はこれより淡き色の馬の毛色。

鞭打 鞭の當る處にて、馬の右の腹をいふ。

馬の右の腹をいふ。

ほごなる月影のありければ名を得たり。壇の上にて馬より  
おり、指しのぞいて申しけるは、爰は大事の悪處、馬まろばし  
ては悪しかるべし。今日は馬を勞らむ。さて、手綱、腹帶よりあ  
はせて、七寸に餘りて大きに太き馬を、十文字に引きからげ  
て、鎧の上にかき負ひて、椎の木のすだち一本、振り切り杖につ  
き、巖の間をしづく。こころ下りけれ。東八箇國に大力こは  
いひけれども、只今かゝる振舞、人倫には非ず、誠に鬼神の業  
こそぞ、上下舌を振ひける。崑山は、此の巖石に馬損じては不便  
なり。日比は汝にかゝりき。今日は汝をはぐくまむ。こいひけ  
る、情深しと覺えたり。

其の後三千餘騎、手綱かいくり、鎧踏張り、手を握り、目を塞  
ぎ、馬に任せ、人に随つて、劣らじ劣らじと落しけるに、然るべ  
き八幡大菩薩の御計ひにや、馬も人も損ぜざりけるこそ不

七寸 ナ、キ。馬の丈を計  
るには四尺を標準とし  
て、それ以上を單に二寸、  
二寸といふ。  
すだち 眞直ぐに生ひたる  
木。

思議なれ、落しも果てず、白旗三十旒ささ捧げ、三千餘騎同時  
に鬨を造る。山彦答へて夥し。平家の城郭に亂れ入りて、豎様  
横様、蜘蛛手、十文字に馳廻り、喚き叫んで戦ひければ、城中に  
は東西の城戸（城の戸）口ばかりこそ防ぎけれ、さしも恐ろしき巖石  
より、敵寄すべしこそ思はざりければ、打延べて左右の城戸  
口の弱からむ時、軍せむきて、鎧、物具脱ぎ置きて、小具足（小具足）ばか  
りにて居たる處へ、はつと寄せ、ごつと鬨を造りたれば、弓矢  
を取り、馬に乗る隙を失ひ、あわて迷ひ、味方の兵も皆敵に見  
えければ、適、馬に乗り、弓矢を番ひける者も、味方討に討殺さ  
れ、斬殺されて、上になり下になつて、心も身にそはず、度を失  
ひ、騒ぎふためきける有様は、小魚の溜り水に集り、宿鳥（宿鳥）の枝  
を争ふに異ならず。

御曹司下知し給ひけるは、城郭廣博なり。賊徒數を知らず。

小具足 コダック。鎧など  
の下に著くる小道具。籠  
てすはて  
手・脇當等。

御曹司 オンザウシ。身分  
ある人の子息にて、未だ  
部屋住なるものの稱。こ  
こにては義經。



多く官軍を亡さむ事、最も不便なり。火を放て。と宣へば、武藏坊辨慶、屋形に打入り、假屋に火をさす。折ふし西の風烈しくして、猛火城の上へ吹覆ふ。平家の軍兵、煙に咽び火に責められて、今は敵を防ぐに及ばず。取る物も取りおへず、濱の汀に逃出でつゝ、海の藻鹽シヨウに馳入つて、船に乘らむこそ迷ひける。助船も多くありけれども、そも然るべき人々をこそ乗せられ、次々の者共をば乗せざりければ、乘らむ乗せじとするほごに、多く海にぞ沈みける。猛火の煙、蹴立ての灰、逃去る道も見えざりければ、皆敵にぞ討たれける。されば助るは稀に、亡ぶるは多し。無慙といふも愚なり。（源平盛衰記）

雪、灑ユキ、笠カサ、檐エダ、風捲、袂タビ。  
他年鐵柵峰頭險。

呱呱カカ、覓ミ、乳ニ、若ニ、爲ニ、情ニ。  
吐ハク、叱シ、三軍、是此聲。（梁川星巖）

辨慶 熊野別當辨正の子。幼名鬼若。比叡山の西塔に住し、武藏坊と稱す。義經に従ひて戦功あり、衣川に戦死す。

源平盛衰記 四十八卷。源平二氏の興亡盛衰のさまを記述せる物語。作者未詳。笠 笠の縁。鐵柵 一の谷の北方なる山。海拔二三八米。梁川星巖 詩人。名は孟緯。美濃の人。江戸、京都等に住す。安政五（二五二八）年歿す。年七十。

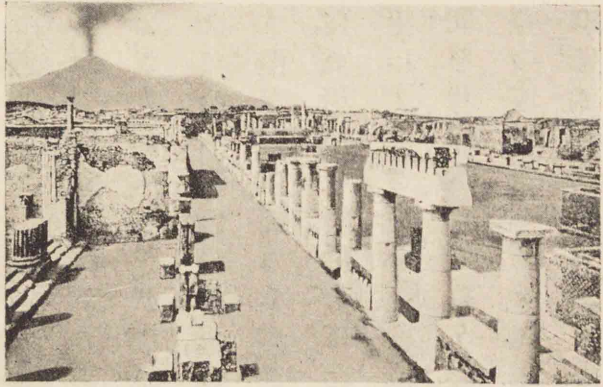
一〇 南歐の空

四月下旬の朗かな南歐の空は、ナポリ灣の上になごやかに、輝く穹窿を築いて、その基底に横たはる市街を、丘陵を、海を、さらにゆるやかに煙をあげてゐるヴェスヴィオの火山までをも、青色の藤絹の日の光に包んでゐる。

澄んだ空氣の柔かさ、黄橙オウシキの實の高い薫り、蜜蜂の羽音、蒼白い橄欖の樹林の下に寄する海波の白銀の頭、そして、丘の上へくゞと肩をすばめ合ふやうにして、次第に高く、樹林の間を背伸びするやうに立ち重なつてゐる人家、人げ少き眞晝の坂を、聖マルティノの寺院の廻廊から見おろせば、南國の光と、大氣オホキはこゝに凝つて動かざる温き靜けさを造り出したやうである。

四月 大正九年。ナポリ灣 伊太利南部の港灣。灣に臨みて、ナポリ市街あり。Napoli. なごやかに おだやかに。穹窿 キュウリユウ。高く弓なりに曲ること。ヴェスヴィオ ナポリ灣の東岸ナポリ市の東方に聳ゆる活火山。海拔一一七六米。Vesuvio.

聖マルティノ ナポリ市の西北方、小丘の中腹にあり。内部の装飾の美と共に堂前よりの眺望の雄を以て知らる。St. Martino.



ポンペイの遺址

不意に、その静けき中空へ、鐘の音が響き渡る。匂はしき氣を  
 をごよもして、丘の麓より、中腹より、頂より、正午を告ぐる寺々の鐘  
 の音が、空中に響き交はす。今まで鐘樓の屋根に羽を休めてゐた無  
 数の燕が、その響と共に、空中に舞立ち、擴り、音の波と光の波とをく  
 ぐつて中空に亂舞する。人影のない石の廻廊へ、白い圓柱の立ちつ  
 づく間へ、その音波は、空氣の微動となつて、奥深くまで消えこんで  
 行く。その奥まつた密室の戸が開いて、裾長く纏うた黒衣をさばいて、足早に、廻廊をめぐつて行く祈禱僧等の姿が、一

人また一人と現れて消えて行く。

我々三人の旅人は、一人の案内者に連れられて、その寺院の中庭へ來て立つてゐた。明るさが、庭の隅々まで照らして、草花の地に落す影をもくつきりと浮かびいださせ、噴水のむせぶ音にも影が漂ひ、四月の空は、この廻廊に取りこめられる中庭の中に、永遠の光と恒久の静けさを植ゑつけてゐるやうである。

朗かな空一面に流れ敷く陽光の中に、立ちのぼり行くヴェスヴィオの煙、火山特有ななだらかな形状、嘗てポンペイを埋めつくして、幾多の生靈を灰と土とに歸せしめた自然は、今や悠然たる姿をして、ナポリの海と、ナポリの都市とを見おろし、不斷の威嚇と無言の壓迫とを人間生活の上へ加へてゐる。この活火山の上に沈み行く日を眺めやる、薔薇

ポンペイ 伊太利古代の都市。ヴェスヴィオ火山の東南麓にあたり、ナポリ灣に臨む。ローマ人の別荘多く、繁華を極めしが、西紀六三年地震にて大損害を受け、七九年八月ヴェスヴィオの噴火によりて、溶岩及び灰のため完全に埋没せらる。一八六〇年以後發掘せられ、現に全市の五分の三以上は掘出されたり。  
Pompeii.

色の幅廣き雲が山頂近くに漂ひ、やがて、日の光が山の背後より亂射して、その雲を一時に眞紅に輝かし、立ちのぼる煙を紫に變ずる。それも暫くして、刻々に光の亂射は薄れ行き、一片二片の落ち雲が山の頂より少し下をめぐつて、天上より反映する光に薄紅をばかし出し、やがて、その額の卷絹が乳白に褪める頃さなるに、空一面は陽光からその固有の領土を恢復して、うるほひある深い藍青の紫だつた南歐獨特の色を浮かばせて來るのである。もうその時は、山頂を繞つて暗い影がうづまき、ほのかな銀鼠色の煙がその暗影の中に溶込んで行くのである。

海岸のホテルの窓に波の音が響いて來て、四月の夕風は南國の暖氣を水上から運んで來る。海港の夕べは悲しく旅情をそゝつて、マンドリンや、ギターやを奏しながら、夜曲を

マンドリン 四絃の洋樂器の一種。Mandolin.  
ギター 六絃の洋樂器の一種。Guitar.  
夜曲 夜の曲。夢幻曲。Nocturne.

唄ひつゝ、流れ行く物乞の哀な聲が、微かな波の音こまじり合つて、埠頭に漂ふ赤い火をかゝげた船が警笛を鳴らしつつ港内へはひつて來る。この地のホテルで客死した日本の畫家があつた。彼こそはこの南國の異境土に眠る唯一の日本人であらう。巴里でその人の畫作の展覽會が催される筈になつてゐる中に死んでしまつて、その運びにもならないでしまつた。おそろく、病床で送つた夕暮ごこに、彼はこの海港の悲しさをしみて、身に感じたに違ない。

ナポリとポンペイとの間は廿四軒ほどである。汽車も自動車の便もある。海岸沿ひの白い砂塵の立つ途を、眞正面に海風を受けつゝ、自動車を走らせて行けば、四月の日は照りながらも、どこもなく冷やかさを覺える。世には、黙々として四周から押寄せて來る砂漠の歩みの下に埋められた中央

日本の畫家 名は廣瀬勝平。洋畫家。兵庫縣の人。美術學校の出身。歐洲に留學中、大正九年三月ナポリに客死す。

亞細亞の都市の如きもあらう。海波に卷かれ、激浪に襲はれて、水中に陥没して跡方もなくなつた都市もあるであらう。けれども、ポンペイの如く、全市が熱砂と灰との厚い層に包まれて、しかも眞夏の白晝に地上から姿を隠し、その後殆ど千八百年間も地中に埋められたまゝで、再びその原型を白日の下に曝さるゝに至つた如き悲惨なものはあるまい。

ポンペイはその全滅の憂日に逢ふ紀元七十九年よりは十七年前、同じ六十三年に大地震のため、その大部分が破壊された。けれども、この前兆的の出来事にも懲りずに、都市はこの十六年の間に全き美觀を立て直してゐたのであつた。最もこの火山の爆發と、都市の埋没とは、白晝に行はれたがために、その住民の大部分は脱れることが出来たらしい。今日、化石の如きものとなつて残される遺骸や、白い灰の堆積

大陽に曝せらる

となつて四五の人の集つてゐた姿を示すものなどは、その住民の極めて小部分であつたらしいこの事である。脱れ出た人々はまた取つて返して、今日に於て見る如き厚い地層で覆はれなかつた自分等の住居から、飛ばされ、碎かれてはゐても、手近に役立つ家具類や、貴重な品をそれごとく取出して、立退いたらしいこの推察であるけれども、その後、全市が影も形も見えぬまでに地中に埋められて、何の物音一つ立てるでもなく、**殷賑**なる都市は、永久の沈黙の姿に變じてしまつたのであつた。

十六世紀の末に、この埋没市の地下を穿つて水路が通ぜられ、十八世紀の中葉にはその一部が發掘せられ、十九世紀の半ば以後に至つて、初めて組織立つた發掘が行はれ、それが今日もなほ續きつゝあるのである。

十八世紀云々 一七四八年初めて、その一部發掘せられしも、組織的に發掘事業の開始せられしは、一八六〇年以後フィオレルリ (Fiorelli, 一八九六年歿す) の指導の下に行はれしものなり。

八つの巷門、二重の高い壁、狭いけれど眞直な街路、殆ど同じ構造に櫛比して建てられた家、議政場、圓形劇場、法廷、獄舎、墓場への路、門外の墓場、整然たる古代文明の典型を見せて、所謂木乃伊の都市は、今や春光の照りつける下に、舊時のままの姿を露出してゐる。木造の部分が焼け、玻璃は溶け、石も煉瓦のみが立残つてゐる都市ではあるが、舗石路の上の車の轍の痕も、街路の角の石の井戸側の擦りへらされたのも、そのまゝに残つてゐる。歩道は極めて狭く、一人の人の歩くだけぐらゐの幅しかなく、行逢ふものは、抱き合ふやうにして道譲りでもしなければ通れさうにはない。大方の家は、中央に小さな庭を置いて、其處には水盤や、小さな像などを据ゑ、その前方を訪問客を迎へる客間に當て、その後方を家族の住居に當ててゐる。會堂、居間、寢室、湯殿、それらの部屋

櫛比 シツピ。櫛の齒の如く立並ぶこと。

部屋も、薄いながらに色彩を保つて、當時のまゝに見るこゝが出来来る。日の光は中庭へ落ちて、奥まつた室の中まで反射光線を送り、つい昨日まで人が住んでゐた如き明るさを見せてゐる。

古代劇場の石階の上へ腰をおろした我々は、四月の陽光を浴びて、暫くぢつとしてゐた。物音一つない靜寂が四邊を領して、久し振で日の目を見た地面からは、かげろふが立ちのぼり、青く輝く空は、海の上へ、廢墟の上へ、さらに、ヴェスヴィオのなだらかな双肩へ、八方にその光の領土を擴げてゐた。我々はこの廢墟に來て、丁度地球の斷層面に對して立つやうに、大きな自然の力、時の力のまぎ／＼と刻み出されてゐるのを感じるのであつた。この自然の力、時の力の歩み行く跡を、それに従つてさめて行くのが科學であり、その力

科  
事  
威  
る

を瞬間にして身に感ずるのが詩人である。

我々が記念に撮つた寫眞の中に、この木乃伊都市の議政場の一部と、人間と、ヴェスヴィオの煙と、南伊太利の空とが收められた。其處を出て再び街路の上を歩いて來ると、何處でも見られる亞米利加人の遊覽者が、三々五々隊をなして通つて行くのが見られた。悠然たる姿をして、青空へ煙を吐いてゐるヴェスヴィオへは電車が通つてゐて、登ることも容易であるが、この廢墟で十分の疲勞を覺えた我々は、再びポルターマリナの巷門から出て、待つてゐた自動車の方へ歸つて來た。そして、遊覽者のために出來てゐる小さな料理店で食事をして、『ポンペイ最後の日』の話などを語り合つて、再び車上の人となつた。

ナポリ發の急行列車は、また我々を羅馬の古都へ連歸つ

ポルターマリナ 現在發掘されたポンペイの西南部にあたる巷門。ナポリ灣に向かつて開く。Porta Marina.  
ポンペイ最後の日 英國の小説家リットン (E. D. Lytton) が一八三四年に發表したる、その傑作小説の名。The Last Days of Pompeii.

た。若葉に注ぐ雨が羅馬の街々の舊い砂塵を取りしづめて、靜寂を味はしむるには十分であつた。馬車はその街々の上を、搖れながら走つて行く。南方の光の空の下から、この古都の雨に曇つた重たい空のもこへ歸つて來ると、俄に寂しさに引きしめらるゝ、心持を味はしむるにはゐられなかつた。舊い巨大な建物を洗ふ雨、鋪石の間へ小さな流をつくる雨、舊い大地へ浸込んで行く雨、旅人の心の中にも、マロニエの若葉を傳つて降り注ぐ雨。

灰色が全市を包んで、空には一羽の燕すら羽を翻さない。細やかな無數の雨の手は、しごく、こ黒ずんだ古代建築物の殘壘を撫で、近代の眞白な記念物の上を走る。この雨の中を、我々は、故郷へでも歸つたやうな心地で、何處ともなく歩き廻つた。(吉江喬松の文による)

マロニエ 大栗の木。  
Marronnier (佛)

吉江喬松 文學者。明治十三年長野縣に生まる。早稻田大學佛文科の出身。大正五年より九年まで佛蘭西に留學し、現に同大學文學部教授たり。

# 一一 有王島下り

さるほごに、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人残されて、憂かりし島の島守となりけるこそうたてけれ。

僧都の稚くより不愍にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、今日既に都へ入ると聞えしかば、有王島羽まで行向かひて見れども、我が主は見え給はず。如何に。と問へば、それはなほ罪深しとて一人島に残されぬ。と聞きて、心憂しなごも愚かなり。常は六波羅邊に佇みて聞きけれども、何時赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍びておはしける處へ参りて、この瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今は如何にもして

鬼界が島 今の鹿兒島縣大島郡の島。硫黃島ならん。と云はる。  
二人 丹波少將藤原成經。平判官康賴。  
今一人 俊寛のこと。俊寛。寛雅の子、僧都に任ぜられ、法勝寺の執行となる。平清盛の專横を憤り、治承元(一八三七)年藤原成親等と結び、後白河法皇を奉じて兵を擧げんとし、露れて、成經・康賴と共に鬼界が島に流され、終に治承三年歿す。年三十七。  
不愍にして フエンにして。目をかけて。可愛がつて。  
六波羅 京都市賀茂川の東、五條七條の間。平家の二門の邸あり。

彼の島へ渡りて、御行方をも尋ね参らせばやと存じ候。御文賜はり候はむ。と申しければ、姫御前な、めならず悦び、やがて書きてぞ賜うでける。暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は四月五月に解くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけむ。三月の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつ、薩摩瀉へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人怪しめ、著たる物を剝取りなごしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ人に見せじ。元結の中には隠しける。

さて商人船に乗りて、件の島へ渡りて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畑もなし、里もなし、村もなし。おのづから人あれども、言ふ詞をも聞知らず。有王島の者に行向かひて、物申さむ。といへば、何事。と答ふ。これに

唐船 モロコシアネ。支那に通商する船。

都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行俊寛僧都と申す人の御行末や知りたる。と問ふに、法勝寺も執行も、知りたらばこそ返事はせめ、たゞ頭を振りて、知らぬ。といふ。その中、或者が心得て、いささよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、あそここ、と迷ひありしが、その後は行方をも知らず。とぞいひける。山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋めて往來の道も定かならず。晴嵐夢を破



（畫挿語物家平本古） 寛 俊

法勝寺 ホッショウジ。京都市岡崎にありし天台宗の寺。白河天皇の創建にかゝり、應仁の亂以後廢絶す。執行 シュギヤウ。寺社にある役僧。首として諸務を執行す。

いささよ 否然らすの意。

白雲云々 和漢朗詠集に紀齊名の作として、山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢。

⑥

りては、その面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず。海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡問ふ者もなかりけり。或あした、磯の方より蜻蛉などの如くに瘦せ衰へたる者、よろぼひ出で來たり。もこは法師にてありけり。覺えて、髪は空様におひ上がり、萬の藻屑取りつけて、荆棘を戴きたるが如し。繼目あらはれて皮ゆたひ、身に著たるものは絹布のわきも見えず。片手には荒海布を持ち、片手には魚を貫ひて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず。よろここしてぞ出で來たる。都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるかぞぞ覺えたる。

沙頭云々 同、後江相公の作として、沙頭刻印鷗遊處。水底模書雁度時。

繼目 關節のこと。ゆたひ 肉落ちて皮のたるむこと。

乞丐人 コツジキ。乞食。



ても我が主の御行方や知りたるを物申さむ。こいへば何事。と答ふ。これに都より流され給ひたりし法勝寺の執行俊寛僧都と申す人やまします。と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかでか忘れ給ふべきなれば、これこそそれよ。と宣ひもあへず、手に持てる物を投棄てて沙の上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方は知つてけれ。僧都やがて消入り給ふを、有王膝の上に搔きのせ奉り、多くの波路を凌ぎつ、遙々これまで尋ね参りたるかひもなく、如何に、やがて憂目を見せむはせさせ給ひ候ぞ。と、さめく、とかき口説きければ、僧都少し人心地出で來、扶け起され、誠に汝多くの波路を凌ぎつ、遙々これまで参つたるこそ神妙なれ。たゞ明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀ひしき者ごもの面影を夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身も

いたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來たるをもたゞ夢ごのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何にせむ。有王、こは現にて候なり。さてこの御有様にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ不思議には覺え候へ。と申しければ、いささよ、これは去年少將や判官入道が迎への時、その瀬に身をも投ぐべかりしを、よしなき少將の、今一度都の音信をも待てかし。なご慰め置きしを、愚かに若しやと頼みつ、承らへむはせしかども、此の島には人の食物も絶えてなき處なれば、身に力のありしほどは、山に登りて硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなごせしかども、日に添ひて弱り行けば、今はさやうの業もせず、かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて網人、釣人に手を摺り、膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾

去年 治承二年。  
少將 成經をさす。  
判官入道 康頼をさす。  
その瀬 その折。その時。

九國 九州。

ひ荒海布を取り磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら今日までは永らへたれ。これにて何事をもいはばやこは思へども、いざ我が家へ。と宣へば、有王あの御有様にて家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を肩に引懸け参らせ、教に従ひて行くほごに、松の一村ある中に、より竹を柱とし、蘆を結びて桁梁にわたし、上にも下にも、松の葉をひしと取懸けたれば、雨風溜るべくも見えざりけり。

より竹 波に漂はされて濱邊に寄來れる竹。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、去年少將や判官入道迎への時も、これらが文といふ事もなし。今又汝が便りにもかくとも言はざりけりな。と宣へば、有王涙に咽び、うつ伏して暫しは御返事にも及ばずや、ありて起上がり、涙を抑へて申しけるは、君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人参りて資財雜具を追捕し、御内の者ども搦め取り、御謀叛の次

西八條 京都八條の北にあ  
りし清盛の邸。  
官人 クワンニン。檢非違  
使廳の役人。  
追捕 ツキブ。官に没收す  
ること。

第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。北の方は稚き人を隠しかね参らせ給ひて、鞍馬の奥に忍びて御渡り候ひしにも、此の童ばかりこそ時々参りて御宮仕り候なり。いづれも御歎の愚かなる方は候はねども、中にも稚き人は、餘りに戀ひ参らさせ給ひて、参り候度毎に、如何に有王よ。我を鬼界が島さかやへ具して参れ。と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、瘡を申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は其の御歎を申し、又此の御事を申し、一方ならぬ御物思に思召し沈ませ給ひて、打伏させ給ひしが、去ぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍びておはしけれ。それより御文賜ひて参りて候。さて、取出でて奉る。僧都これを開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、なごや三人

北の方 貴人の妻。こゝに  
ては俊寛の妻。  
鞍馬 京都府愛宕郡。京都  
市の北方。

瘡 モガサ。抱瘡のこと。

流されおはします人の、二人は召還されて候に、何さて一人  
残されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ、尊きも賤しきも、  
女の身ほごいひがひなきことは候はず。男の身にて候はば、  
渡らせ給ふ島へも、なごか尋ね参らで候べき。この童を御供  
にて急ぎ上らせ給へ。ごぞ書かれたる。これ見よ、有王よ。この  
子が文の書きやうのはかなさよ。おのれを供にて急ぎ上れ。  
ご書きたるごこの恨めしさよ。俊寛が心にまかせたるうき  
身ならば、何さて此の島にて三年の春秋をば送るべき。今年  
は十二になるご覺ゆるが、これほどにはかなくてはいかで  
か人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべきか。さて泣かれ  
けるにぞ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ  
ごは、今こそ思ひ知られけれ。この島へ流されて後は、曆もな  
ければ月日の立つをも知らず、只おのづから花の散り葉の

はかなき、こゝにてはごり  
ごめのなきこと。

人にも見え 人の妻となる  
意。  
人の親云々 後選集卷十六  
雑歌二に藤原兼輔の作と  
して「人の親の心は闇に  
あらねども子を思ふ道に  
まごひぬるかな」

落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、麥秋を送れば、夏  
ご思ひ、雪の積るを冬ご知る。白月・黒月の變り行くを見ては、  
三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになるご覺  
ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし  
時、此の子が行かむご慕ひしを、やがて還らむざるご慰め  
置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限ごだにも思は  
ましかば、今暫くもなごか見ざらむ。親ごなり子ごなる、夫婦  
の縁を結ぶも、皆この世一つに限らぬ契ごかし。今は姫が事  
ばかりこそ心苦しけれごも、それは生身なれば、歎きながら  
も過さむざらむ。さのみ永らへて、おのれに憂き目を見せむ  
も、我が身ながらつれなかるべし。さて、食事を止め、偏に彌陀  
の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三  
日ご申すに、僧都庵の中にて、遂に終り給ひぬ。年三十七ごぞ

蟬の聲云々 和漢朗詠集卷  
上夏の部に李嘉祐の作と  
して、  
千峯鳥踏舎梅雨  
五月蟬聲送麥秋  
麥秋は陰曆四月ないふ。  
白月・黒月 ビヤクゲツ・コ  
クゲツ。白月は満月。黒  
月は晦の月。  
ござんなれ、こゝあるなれ  
の轉。  
西八條云々 治承元年、平  
家を討たんとして事露  
れ、西八條の邸に召され  
ご時のことをいふ。  
契約束事。

心苦し 氣がかりなり。  
彌陀の名號 ミダのミヤウ  
ガウ。阿彌陀佛の名號。  
普通には「南無阿彌陀佛」  
の六字。  
臨終正念 リンジュウシャ  
ウネン。命の終るに臨み  
て、心亂れず正しきこ  
ご。

聞えし。

有王、空しき姿に取りつき奉り、天に仰ぎ地に俯し、心の行くほど泣きあきて、やがて後世の御供仕るべく候へども、この世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ参らすべき人も候はず。しばしなからへて御菩提を弔ひ参らすべし。さて、寢處を改め、庵を切りかけ、松の枯枝、蘆の枯葉をひしと取りかけて、藻鹽の煙を爲し奉り、茶毗事をへぬれば、白骨を拾ひ、首にかけ、又商人船の便りにて九國の地にぞ著きにける。

後世　ゴセ。あの世。來世。

菩提　ボダイ。梵語。正覺と譯す。

茶毗　ダビ。梵語。火葬のこと。

それより僧都の御女の忍びておはしける御許に参りて、ありし様を始より細々と語り申す。なか／＼文を御覽じてこそ、いご御思は増さらせ給ひて候ひしか。件の島には硯も紙もなければ、御返事にも及ばず、思召されつる御事ども

は、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見参らせ給ふべき。たゞ如何にもして御菩提を弔ひ参らせ給へ。と申しければ、姫御前聞きもあへ給はず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて十二の年尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納め、法師になりて、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに人々の思ひなげきの積りぬる平家の末こそおそろしけれ。〔平家物語〕

他生　タシヤウ。今生に對し、今生以外の他の世界。

曠劫　クワウゴウ。極めて長き時間。

法華寺　奈良縣添上郡佐保町にある尼寺。

七道　東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。

桃李ものいはず春いくばくか暮れぬる  
煙霞跡なし昔誰か栖みし　（和漢朗詠集）

和漢朗詠集　二卷。朗詠の資料たる和歌・漢詩の秀句を輯めたるもの。藤原公任の編。

一二 鹽原

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は安からざる  
悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨りに倦み憊れつゝ、始  
めて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向かひて、今尙茫々たる古の那須野原に入  
れば、天は濶く、地は遐かに、唯平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、  
三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞ見えて、行くほごに  
路は窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて關谷に到れば、人家の  
盡くる處に、涼々の響ありて、これに架れるを入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光冥く、山厚く、壘み、嵐氣冷やか  
に、壑深く陥りて、幾廻せる葛折の後ろには、密樹に聲々の鳥  
呼び、前には幽草歩々の花を發き、愈躋れば、遙かに木隠れの

悒鬱 イフウツ。心のいぶ

せくして快からぬこと。

西那須野 栃木縣那須郡の

村。東北本線の一驛。

那須野原 東西六里南北十

里にわたる。

平蕪迷ひ 荒れたる草原の

遙かに連なれるをいふ。

鹽原 同縣鹽谷郡の町。

關谷 同郡箒根村の字。

嵐氣 ランキ。山の空氣。

葛折 ツツラチリ。曲折多

き路。

すはや 突然の出來事に驚

きて發する聲。

空山 人氣なき深山。

珊珊 サン／＼。玉の鳴る

聲。

音のみ聞えし流の水上は、淺く露れて、すはや、こゝに空山の  
雷、白光を放ちて、頽れ落ちたるか、と凄じかり。道の右は山を  
削りて、長壁となし、石幽かに、蘇碧うして、幾條とも、白絲を亂  
し懸けたる、細瀑、小瀑の、珊々として、濺げるは、嶺上の松の調  
も、定めて此の緒より、やご見捨て難し。

白羽坂を躑えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を躑みて、山  
中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水  
あれば必ず橋あり。全嶺にして三十橋。山あれば巖あり、巖あ  
れば必ず瀑あり。全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれ  
ば必ず熱あり。全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝十六  
名所。七不思議、誰か一々探り得べき。

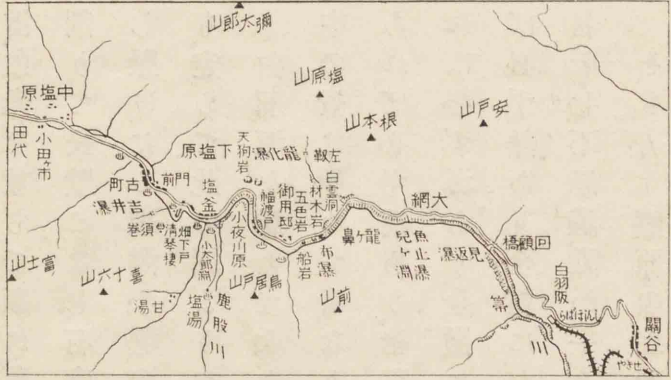
そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分  
けて、深く西北に入り、綿々として、箒川の流に、浜る片岨にし

箒川 源を高原山に發し、

西南流して那珂川に合

て、到る處巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀧、兒が淵、左靱の險は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧、龍が鼻材木石、五色石、船岩などこ眺め行けば、鳥井戸、前山の翠衣に染みて、福渡の里に入るなり。

途すがら、前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが、甚だ興あり。目留むれば、又此の邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。名を問へば、不動澤といふ。



巉巖 ザンガン。岩の尖りて高き貌。  
藥研 ヤゲン。薬種を碎きて粉にする器。  
瑠璃 ルリ。玉の一種。専ら紺青なるにいふ。

踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、地を抜く何百丈と見上ぐる異形の天狗巖あり。絶頂には、はら／＼松も危く立竦み、幹竹割に割放したる断面は、半空より一文字に垂下して、炭々たる其の勢、幾ぞ眺むる眼も留らず。足に任せて、彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて、高さ二丈に餘り、其の頂は平に濶りて、寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれど、状恐ろしげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬りて、夜なく天狗巖の魔風に誘はれて、吼えもしぬべき怪しの物あり。其の昔蒲生飛驒守氏郷此の處に野立せし事あるに因りて、野立石と名付く。それより鹽釜の湯、甘湯澤、兄弟瀧、小太郎が淵

炭々 キフ／＼。山の高き貌。  
噴薄激盪 フンバクゲキタウ。盛んに噴出で、激しく湧きかへる貌。

野立 ノダチ。貴人の外出して、野などに、駕籠・馬を立てて小憩すること。

なごを過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、温泉は五箇所に湧きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨み、俯しては水石の粼々たるを弄び、仰げば西に富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤に落來る流は二十丈の絶壁に懸りて、素縑を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めたる別境なり。

我は此の繪を看る如き清穩の風景に値ひて、かの途上險しき巖と峻しき流との爲に、幾度か魂飛び肉銷して、理むる方なく搔亂されし胸の内は、藹然として頓に和ぎ、恍然として總べてを忘れたり。

縹々 リン／＼。水清くして、石に激する貌。

翠巒 スキラン。緑の峯。

素縑 ソケン。白き絹。

琅玕 ラウカン。玉に似たる美石。

藹然 アイセン。心の和らぐ貌。  
恍然 クウセン。うつろりて我を忘るゝ貌。

痼疾 コンツ。持病。

誠に好くこそ我は來つれ。何ぞ來るここの甚だ遅かりし山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の美しといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならんこ、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚の者ならずや。看よ、看よ、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる峯も、流るゝ谿も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鶏の鳴く音も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲みを忘れ、苦みを忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と軽く、心は此の水と淡し。希はくは今より此の如くして我が生を了らんかな。

（尾崎紅葉「紅葉全集」）

星すでに秋の眼を開きけり

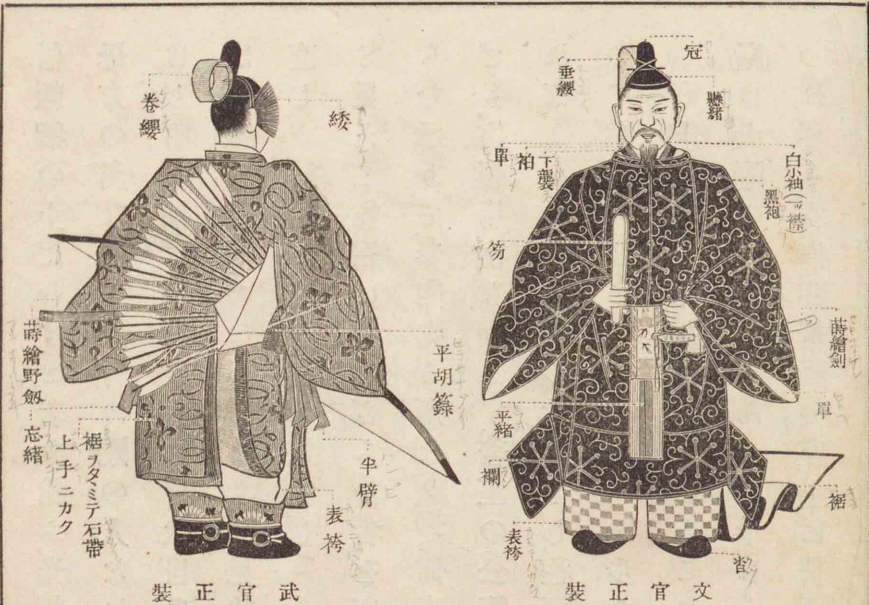
紅葉

尾崎紅葉 小説家。名は徳太郎。江戸に生まる。東京帝國大學國文科に學ぶ。明治三十六年歿す。年三十七。

一三 公卿僉議

内裏には十二月十九日、公卿僉議にて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿このほどは信頼卿の舉動過分なり。さて、不参にておはしましけるが、参内して承らむ。さて、特にあざやかに東帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおこなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ。さて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守護しけるを事もせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵ごもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後ろを経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座

内裏 たいり。皇居をいふ。  
 十二月十九日 平治元(一八一九)年。  
 公卿僉議 クギヤウセンギ。公卿の會議。  
 光頼 權中納言顯頼の長子。參議を経て、權中納言に進み、左衛門督を兼ね。平治元年檢非違使別當を兼ね、後權大納言に進む。承安三(一八三三)年薨す。年五十。  
 (略系)  
 顯頼、光頼 女(忠隆室) 信頼 惟方  
 信頼 藤原忠隆の第三子。後白河上皇に仕へて寵あり、正三位。權中納言・右衛門督に進む。更に近衛大將たらんことを望みたるも得ず。平治元年源義朝等と兵を擧げ、事敗れて捕へられ、京都賀茂河原に斬らる。年二十七。  
 乳母子 メノトゴ。乳母の子。即ち乳兄弟。



武官正装

文官正装

して、その座の上藤達皆下にぞ著かれたる。光頼卿こは不思議の事かな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ世にしごけなう見えて候へ。色代して、しづくと歩み、

範能 傳詳かならず。腹卷 ハラマキ。鎧の一種。腹に巻きて、背にて合はすやうに作りたり。  
 雑色 ザフシキ。ザッシキ。無位の役人。  
 自然のこも じものこの。紫宸殿 シ、イテン。南殿(ナテン)ともいふ。内裏の正殿。  
 殿上 殿上の間をいふ。清凉殿の南面にあり。  
 一座 上席に座するをいふ。  
 上臈 ジャウラフ。身分高き人の稱。  
 長方 顯長の子。從二位中納言に至る。性剛直にして清廉。後年清盛の法皇を幽し奉らんとするや極力これを諫めて、止めしめたり。建久三(一八五二)年薨す。年五十三。  
 末座の宰相 末席の參議。しごけなし。亂雜にして秩序なき意。  
 色代 シキダイ。會釋する

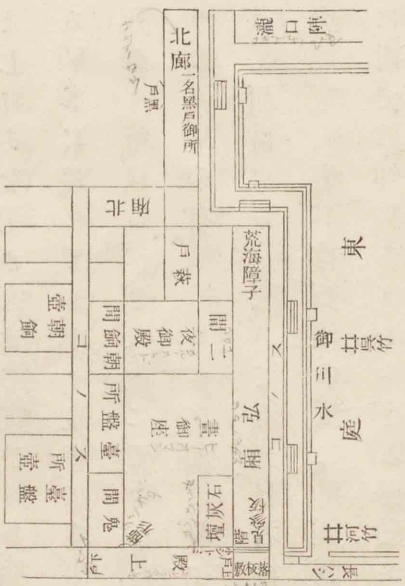


信賴卿の上にむすこ著き給ふ。光賴卿は信賴卿のためには母方の舅なる上、大力の剛の人なれば特に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光賴卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日は、衛府督が一座するこ見えて候。召に參ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしとやらむ承りて、參内する所なり。抑、何事の御説ぞ。と問はれければ、信賴卿物も宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして兪議の沙汰もなし。程經てつい立ちて、惡しう參つて候ひけり。さて、しづくと歩み出でられけり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざ

こ。禮をするこ。  
舅。母の兄弟の稱。  
尻。裾のこ。  
氣色して。面を正して、色を改めての意。  
衛府督。近衛・兵衛・衛門の役所を總稱して衛府といふ。こ、にては右衛門督をいふ。

第三世  
柳詰の  
兵士に  
あつた



りつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれこの人を大將として合戦せば、いかばかりか頼もしからむ。と申せば、傍なる者、昔、賴光、賴信とて、源氏の名將おはしましき。その賴光をうち返して、光賴と名告り給へば、これも剛にましますぞかし。こいへば、又傍より、なごその賴信をうち返して、信賴と附き給

ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはします。こいへば、壁に耳、天に口といふこあり。恐ろし。恐ろし。聞かじ。こいひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

賴光。多田滿仲の子。驍勇、射を善くす。治安元(一六八一)年卒す。  
賴信。賴光の弟。兵法に達し、鎮守府將軍に拜せらる。永承三(一七〇八)年卒す。年八十一。  
壁に耳云々。俚諺に「壁に耳あり、天に口あり」多言を戒むる語。

光頼卿  
上ノ小部  
荒海ノ障子  
清涼殿ノ夜ノ御殿  
北ノあた  
清涼殿  
見參ノ板  
鳴板  
退出  
荒海ノ障子  
清涼殿ノ夜ノ御殿  
北ノあた  
清涼殿  
見參ノ板  
鳴板  
退出  
荒海ノ障子  
清涼殿ノ夜ノ御殿  
北ノあた  
清涼殿  
見參ノ板  
鳴板  
退出

光頼卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小部の前見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せて宣ひけるは、公卿僉議にて催されつる間、参じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當時の有識、然るべき人どもなり。その内に入らむこと、甚だ面目なるべし。さて、先日右衛門督が車の尻に乗りて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向かはれけるは如何に。以ての外然るべからざる舉動かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大に恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。宣へば、別當、それは天氣に

小部 コジトミ。殿上の間にある小部。この前を通りて、見參の板を踏む。見參の板 ゲンザンのイタ。鳴板（ナルイタ）ともいふ。踏鳴らして、参入。退出なごを知らしむ。荒海の障子 清涼殿の弘廂にたてたる衝立。萩の戸 清涼殿の夜の御殿の北にあたる部屋。惟方 檢非違使別當藤原惟方。光頼の弟。平治の亂に信頼を助けしが、途中に絶ちて、二條天皇を奉じて六波羅に至る。後重用せられしが、故あつて阿波に流さる。有識 イウシクのものしり。學者。少納言入道 藤原通憲のこと。鳥羽・崇徳・近衛の三朝に歴仕し、正五位下日向守に任ず、學才ありて卓然として秀づ。後少納言に任ぜらるゝや入道して信西といふ。平治元年信頼のために殺さる。

て候ひしかば、さて、赤面せられけり。光頼卿重ねて、こは如何に勅諭なれば、さて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ徳政なり。一度も惡事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもごかるゝ、ほごの事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野参詣を遂げずして、切目の宿より馳上るなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等待受けて、大勢にてぞあんなる。信頼卿が語らふ所の兵若干ならじ。平家の大勢おし寄せて攻めむには、時刻をや廻らすべき。若し又火なごを

神樂岡 京都市の東北にあたる。近衛大將 近衛府の長官。檢非違使別當 檢非違使の長官。先蹤 センシヨウ。先例。天氣 主上の仰せ。一議 ひごこと。一意見。勸修寺内大臣 藤原高藤。良門の子。正三位内大臣に至る。三條右大臣 高藤の子定方。從二位右大臣に至る。延喜 醍醐天皇の御代。讒佞 ザンネイ。さんげんしてへつらふこと。さしもごく「さし」は強めていふ「もごく」は批難され、攘斥さること。大貳清盛 平清盛。忠盛の子。當時は大宰大臣たり。後從一位大臣に至り、入道して淨海と稱す。養和元（一八四一）年薨す。年六十四。

懸けなば君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたりむだにも朝家の御歎なるべし。如何にいはいはむや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはするごころ聞ゆれ。相構へて隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽は何處に。夜のおごころに。左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。又、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。と宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方さまの女房など影ろひ候らむ。と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今かくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參ら

主上 二條天皇。  
黒戸の御所 清涼殿の北方にある殿舎。御膳所。  
上皇 後白河上皇。  
一本御書所 イッホンゴシヨドコロ。内裏の殿舎の一。内裏の東門なる建春門を入りて、南、侍從所の次にあたる。  
内侍所 ナイシンドコロ。神鏡を申す。  
温明殿 ウンメイテン。紫宸殿の東方にあたる殿舎。  
夜のおごころ 主上の御寝し給ふごころ。  
朝餉 アサガレヒ。朝餉の間。朝夕の御食事の聞召すごころ。  
櫛形の穴 クシガタのアナ。殿上の間北側にある小さき窓。  
影ろふ 影のさすごころ。

せたり。未代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。さて、のろろしげに憚る處なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむごよに、凄じげに立ちたりけり。光頼卿、且は悲しくて、われ如何なる宿業によりてか、る世に生まれ會ひ、憂きごころをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。さて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。〔平治物語〕

王法 ワウハフ。天下に王たる道。  
のろろしげ にくしくしげ。  
宿業 スクゴフ。前世に犯したる罪業。  
許由 キョウイウ。支那箕山の隱者。堯がこれに國を譲らんとすに聞きて、耳の穢れなりといひて、颯川の水に耳を洗ひたりといふ。  
上の衣 ウヘのキヌ。袍のごころ。  
平治物語 三卷。主として平治の亂の顛末を敘したる物語。作者未詳。



鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠を  
めのごとし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿にな  
つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従  
へむごしければ、菊池原田を始として、處々に城を構へてた  
て籠れば、其の儀ならば、いで落して見せむ。さて、未だ勢も附  
かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の末  
より十五歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、城を  
落すこと數十箇處なり。城を攻むる謀敵を伐つ術、人に勝れ  
て、三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使に押しな  
つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申  
す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿  
を上卿として外記に仰せて宣旨を下さる。  
源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤甚。早

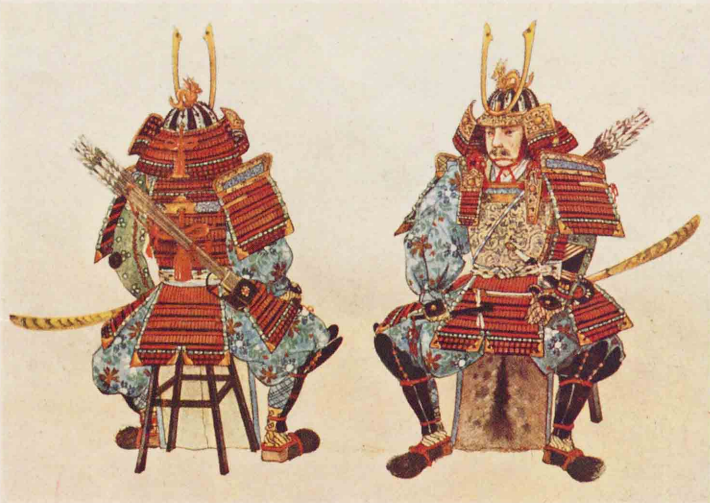
當さいふに近し。  
家遠 傳未詳。  
めのご 傳もりやく。  
忠景・忠國 共に傳未詳。  
總追捕使 ソウツキアジシ。  
悪人を追捕するより起り  
し名。一郷・一郡の追捕  
使に對し、一國又は數國  
の追捕使を總追捕使とい  
ふ。  
筑紫 ツクシ。上代、今の  
九州の總名として用ひら  
る。  
菊池・原田 共に九州の豪  
族。  
香椎宮 福岡縣糟屋郡香椎  
村に鎮坐する官幣大社。  
仲哀天皇・神功皇后を祀  
る。  
神人 神官・社人。  
久壽元年 一八一四年。  
公能 左大臣實能の子。右  
大臣に至り、應保元(一  
八二一)年薨す。年四十  
七。  
上卿 シャウケイ。公事を  
取行ふ人の上首をいふ。  
外記 ケキ。太政官の役

可令禁進其身、依宣旨執達如件。  
然れども、爲朝猶參洛せざりければ、同じき二月三日、父爲  
義を解官せられて前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞  
きて、親の科に當り給ふらむこそあさましけれ。この儀なら  
ば、我こそいかなる罪科にも行はれむずれ。さて急ぎ上りけ  
れば、國人共も上洛すべき由申しけれども、大勢にて罷り上  
らむこと、上聞穩便ならず。さて、形の如くに附従ふ兵二十八  
騎ばかりぞ召具しける。依つて去年より在京したりしを、父  
不孝を宥して今度の御大事に召具しけるなり。  
爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが紺地に  
色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍さいふ鎧  
を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子  
の金物打つたるを着るまゝ、三尺五寸の太刀に熊の皮の

人。  
宰府 太宰府の略。福岡縣  
筑紫郡水城村に舊趾あ  
り。  
忽諸 コツショ。上命を輕  
んずること。  
綸言 リンゲン。天子の詔  
をいふ。  
參洛 上洛と同じ。  
目角 メカド。目の端。即  
ち目頭と目尻と。  
獅子の丸 獅子の形を丸く  
したる模様。  
直垂 ヒタ、レ。鎧直垂。  
鎧の下につくる服。袖・裾  
に括あり。  
八龍 源氏重代の鎧の一。  
唐綾 カラアヤ。支那より  
渡來したる綾。今の綸子  
なり。  
大荒目 オホアラメ。通常  
の鎧よりも札の大きく、  
緘す緒も太きもの。重量  
大なり。

尻鞘入れ、五人張の弓、長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十  
六差したる黒羽の矢、負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出で  
たる體、樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも  
劣らず。されば、堅陣を破るこゝ吳子孫子が難しとする所を  
得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れず  
といふこゝなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に  
聞ゆる爲朝見んとて、擧り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏つて爲朝  
久しく鎮西に居住仕つて、九國の物ども従へ候について、大  
小の合戦數を知らず。中にも、折角の合戦二十餘箇度なり。或  
は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、  
皆利を得るこゝ夜討に若くこゝ侍らず。然れば只今高松殿  
に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はむに、火を遁れ



圖用着鎧

尻鞘 シリザヤ。皮にて作  
り、袋の如くなりて、鞘  
にかくるもの。  
鉞 ツク。弓の矢すりの處  
に打つ折釘。

樊噲 漢の沛の人。高祖の  
臣として勇猛の名高し。

後舞陽公に封ぜらる。

張良 漢の高祖の謀臣。字

は子房。天下統一の後留

公に封ぜらる。

養由 周末の楚の大夫。名

は基。弓の名家。百歩を

距てて柳葉を射るに中ら

ずといふこゝなしと稱せ

らる。

折角 セツカク。殊に骨を  
折りたる意。

高松殿 後白河天皇の御  
所。西の洞院の東、三條  
通の北にあたる。

む者は矢を免るべからず、矢を恐れむ者は火を遁るべからず。主上の御方、心憎くも候はず。但し兄にて候義朝なごころ、駈けいでむずらめ。それも眞中さして射通し候ひなむ。まして清盛なごがへろく、矢、何ほどの事か候べき。鎧の袖にて拂ひ、蹴散らして捨てなむ。行幸他處へならば、御免されを蒙つて、御供の者少々射むざるほごならば、定めて駕輿、丁も御輿を捨てて逃去り候はむずらむ。其の時爲朝参り向かひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせむこと、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせむこと、爲朝矢二つ三つ放さむざるばかりにて、未だ天の明けざらむ前に勝負を決せむ條、何の疑か候べき。こ、憚る處もなく申したりければ、左府、爲朝が申す様、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討なごいふ事、汝等が同士軍、十騎、二十騎の私事なり。

心憎く 覺束なく心おきせ  
らるゝ意。

駕輿丁 カヨチャウ。御輿  
を昇く仕丁をいふ。

さすが主上・上皇の御國争に、源平數を盡くして、兩方に在つて勝負を決せむに、むげに然るべからず。其の上、南都の衆徒を召さるゝ、ここあり。興福寺の信實・玄實等、吉野・十津川の指矢・三町・遠矢・八町といふ者共を召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に着き、富家殿の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等を待ち調へて合戦をば致すべし。又明日、院司の公卿殿上人を催さむに、參らざる者共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること、兩三人に及ばば、殘はなごか參らざるべき。こ仰せられければ、爲朝・上には承服申して、御前を罷り立ちて、咄きけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬことなれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御計ひ如何あらむ。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せむこそぞ仕り候らむ。明日までも延びばこそ、吉野

三〇

南都の衆徒 奈良興福寺の僧兵。  
信實・玄實 僧兵の頭立ちたる者。傳未詳。  
指矢 サシヤ。射法の一。矢はまさわら矢の如し。  
遠矢 トホヤ。遠く射ること。  
富家殿 フケドノ。頼長の父藤原忠實をいふ。太政大臣・攝政・關白に至る。  
應保二(一八二二)年薨す。年八十五。平等院の西なる富家殿に住じたり。  
院司 院の廳。

法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらむには、戦ふこともいかでか利あらむや。敵勝に乗るほごならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。こそぞ申しける。〔保元物語〕

義朝畏つて申しけるは、合戦の術様々に候へども、即時に敵を従へ立處に利を得ること、夜討に過ぎたること候はず。就中南都より衆徒大勢にて、吉野・十津河の者共を召具して、千餘騎にて今夜宇治に着き、明朝入洛仕る由聞え候。敵に勢のつかぬ前に罷り向かつて、忽ちに勝負を決し候はん。とぞ申しける。信西御前の床に候ひけるが、關白殿の御氣色を承つて申しけるは、此の義尤も然るべし。詩歌・管絃は臣家の弄ぶ所なりと雖も、それ猶味しいはんや武藝の道に於てをや。ひたすら汝が計ひたるべし。誠に先んずる時は人を制す。今夜の發向尤もなり。と申しける。〔保元物語〕による。

保元物語 三卷。主として保元の亂の顛末を記したる戦記物語。作者未詳。

關白殿 藤原忠通のこと。  
忠通 忠實の子。四世に歴任して、攝政・關白・太政大臣たり。長寛二(一一八二)年薨す。年六十八。  
臣家 シンケ。公卿のこと。



一五 白峯の陵

逢坂の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すこ  
し難く、濱千鳥のあこ踏みつくる鳴海瀉、富士の高根の煙、浮  
島が原、清見が關、大磯、小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、  
鹽竈の和ぎたる朝げしき、象瀉の蟹が苦屋、佐野の舟梁、木曾  
のかけ橋、心のこまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見  
まほしめて、仁安三年の秋は、蘆がちる難波を経て、須磨、明石  
の浦吹く風を身にしめつゝも、行きくゞて讃岐の眞尾坂の  
林こいふにしばらく、節をこむ草枕遙けき旅路のいたは  
りにもあらで、觀念修行の便りこせし庵なりけり。  
この里近き白峯こいふ處にこそ新院の陵はあれと聞き  
て、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥

逢坂 大津市の南方。京都府との中間にある要路。昔時此の地に關所ありき。  
鳴海瀉 ナルミガタ。愛知縣愛知郡の海岸。今は陸地となりて、舊形を存せず。  
浮島が原 靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾にある原野。  
清見が關 同縣庵原郡清見瀉の近くにありし關所。  
大磯・小磯 共に神奈川縣中郡大磯町の海岸。  
むらさき 紫草。紫草科に屬する多年生の草。二尺餘に達し、夏季白色の花をつく。根に深紫色の部ありて染料に供す。  
鹽竈 宮城縣宮城郡。松島灣の一部をなす。  
象瀉 キサガタ。秋田縣由利郡象瀉町。昔時松島と併稱せられたる名所なりしが、後鳥海山の噴火によりて埋没し、今舊態を存せず。  
苦屋 トマヤ。苔を以て葺きたる小屋。  
佐野の舟梁 サノのフナバシ。群馬縣群馬郡佐野村にありし舟橋。  
木曾のかけ橋 長野縣西筑摩郡駒ヶ根村にありし棧道。  
仁安三年 一八二八年。  
蘆がちる 難波の枕詞。  
眞尾坂の林 香川縣綾歌郡王越村乃生の地か。  
節 ッエ。竹の名、轉じて杖の意。  
いたはり 疾病。  
觀念 餘事を思はず、一心に悟道を念すること。  
白峯 綾歌郡松山村にあり。海拔約三〇〇米。  
新院 崇徳上皇。  
青雲のたなびく日 青天の日。青雲は青空。  
うばら 荊。茨。  
かつら 葛。  
清涼 清涼殿。天皇の當の御座所。  
百のつかさ 百官。多くの役人。  
藐姑射の山 仙洞御所。即

深く茂り合ひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽こいふけはしき嶺うしろに峙ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、まのあたりもおぼつかなき心ちせらる。木立わづかに透きたる處に、土高く積みたるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、うばら、かづらに埋れてうら悲しきを、これなむ陵よこ思へば、心もかき暗まされて、更に夢現こも分きがたし。  
げにまのあたりに見奉りしは、紫宸、清涼の御座に大政きこしめさせ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君ぞこて、御言かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲りましし後、藐姑射の山の玉の林をしめさせ給ひしに、思ひきや、麋鹿のかよふ路のみ見えて、まうづる人もなき深山のおごろの下に、神がくれ給はむこは、萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業

きたる小屋。  
佐野の舟梁 サノのフナバシ。群馬縣群馬郡佐野村にありし舟橋。  
木曾のかけ橋 長野縣西筑摩郡駒ヶ根村にありし棧道。  
仁安三年 一八二八年。  
蘆がちる 難波の枕詞。  
眞尾坂の林 香川縣綾歌郡王越村乃生の地か。  
節 ッエ。竹の名、轉じて杖の意。  
いたはり 疾病。  
觀念 餘事を思はず、一心に悟道を念すること。  
白峯 綾歌郡松山村にあり。海拔約三〇〇米。  
新院 崇徳上皇。  
青雲のたなびく日 青天の日。青雲は青空。  
うばら 荊。茨。  
かつら 葛。  
清涼 清涼殿。天皇の當の御座所。  
百のつかさ 百官。多くの役人。  
藐姑射の山 仙洞御所。即

こいふものの恐ろしくも添ひ奉りて、罪をのがれさせ給はざりしよ。世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。夜もすがら供養し奉らばや。陵の前の平かなる石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつゝも、かつ歌詠みて奉る。

松山の浪のけしきはかはらじをかたなく君はなり

ましにけり

なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日は入りしほごに、山深き夜のさま常ならで、石の床木の葉の衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物こはなしにすさまじき心ちせらる。

月は出でしかご、茂樹がもこは影をも洩らさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るこもなきに、まさしく「圓位、圓位。」と喚

ち上皇の御所。藐姑射の山の仙人の住む處といへるより轉じて仙洞御所をもちくいふに至る。麋鹿、ビロク。麋は鹿の大なるもの。神がくれ。崩御。宿世の業。スクセのゴフ。宿業。

物さはなしに。何さはなしに。うらぶる。心憂くあり。わびし。圓位。西行のこと。歌僧。俗名佐藤義清。圓位とも號す。鳥羽上皇に仕へたりしが、出家して、山水を友とし、四方に周遊す。建久元(八五〇)年歿す。年七十三。

ぶ聲す。眼を開きて透かし見れば、そのさま異なる人の脊高く瘦せ衰へたるが、顔のかたち、著たる衣の色紋も見えで、こなたに對ひて立てるを、西行もこより道心の法師なれば、おそろしこもなく、此處に來るは誰ぞ。こいへば、かの人いふ、「前に詠みつる言の葉の返りご」と聞えむとて見えつるなり。」とて、

松山の浪に流れて來し船のやがてむなしくなり  
けるかな

「嬉しくも詣でつるよ。」と聞ゆるに、西行、新院の靈なることを知りて、地にぬかづき涙を流しぬ。十日餘りの月は峯に隠れてあやなきに、夢路を辿るに異ならず。やがて明け行く空に朝鳥の聲面白く啼きわたれば、重ねて供養し奉りて、山を下り庵に歸りにけり。(上田秋成「雨月物語」)

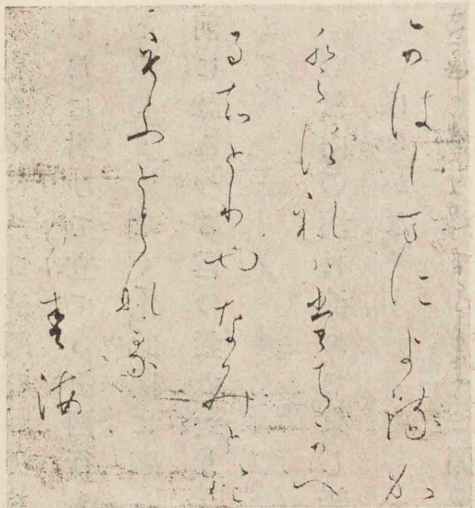
道心。佛道に歸依したる心。

ぬかづく。額を地につけて禮をすること。時儀をす。

上田秋成。江戸時代の小説家。通稱を東作といふ。大阪の人。文化七(二四七〇)年歿す。年七十八。

一六 擬古文抄

曇る夜の月を見る



村田春海筆蹟

芳宜園の月のまごゐは、年ごこの契なれば、こてふにも似ぬよのさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨の名殘、霽れゆかむ空も覺えず、ましてさやけき光まちいでむは、いごゝ心もこなきを、更けゆかばかくのみにあらじを、こよひは寢で明してまし。なごいひつゝ、伊豫簾むなしうかゞげて、

芳宜園、ハギノ。加藤千蔭の號。こてふ、古今集卷十四に讀人しらすとして、月夜よし夜よし人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらす。こてふは「來まごいふ」まうづ 參る。さるは、されど。然れど。かはしまによるかすればたちかへるちどりやなみとおもふごちなる 春海

空のみうちまもらるゝも、いごわりなしや今宵は名におふ園生の花も、いたづらに夜の錦にて、淺茅がもごの松蟲のみやうゝ聲添はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

ばれ間なき月をいかにこいひくゝてそらながめにや今宵あかさむ

かきくらす雲間の影はうごくこも、月まつ蟲よせめてかたらへ (村田春海「琴後集」)

蓮を見る

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水のほごりに、さゝなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白たへの富士のみ雪も消え、あらがねの土さへ裂くこいふなるころ、人皆涼みせむとて、そのやごりにつご

わりなし、せんかたなし。仕方なし。夜の錦、史記項羽本紀に、「富貴、不歸故郷、如破繡夜行。誰知之者」あかぬわざ、満足せざるこ。

村田春海、國學者。春道の次子。琴後翁と號す。江戸の人。賀茂真淵に從ひて古學を學び、和歌をよくす。文化八(一四七一)年歿す。年六十六。

大比叡、比叡山のこ。比良の大わだ、琵琶湖のこ。さゞれ浪、さゞれ浪。國學者清水濱臣の家をさゞなみの舎と號す。白たへの、雪にかゝる枕詞。あらがねの、土にかゝる枕詞。

ひて、高き屋にのぼりて見わたせば、池の面は紅のゆはたこ  
見ゆるぞ蓮の花の咲きみちたるにてはありける。おひたて  
る葉のひろごりたるは、宮路ゆくうまびこのきぬがさの如  
く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷き並べたる如く、  
葉に置ける露は、白玉の五百つ集ひを解きみだしたるにな

山頂

はるの山頂に雲は白く  
霞は白く

蹟筆藤千藤加

む似たりける。池の水清らに澄みて、あそぶいろくづ思ふ事  
なげなり。人々衣の紐を解きさけ、おぼしまに寄りゐて、酒汲  
みかはすほど、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風の涼しき  
に、えならぬ香のかをり來るもたこしへなしや。彼方の岸よ  
り中島まで、長き堤をつきて、石もて作れる橋かけわたせる

ゆはたこ、しほりぞめ、く、  
りぞめ。

うまびこ 貴人。君子。

大庭 紫宸殿の前庭。  
わらふだ 圓座。藁なごを、  
渦狀に平たく編みて圓形  
に作りたる、一種の座蒲  
團。

五百つ集ひ、多く貫きしを  
いふ。

嶺上雲深。

立登る雲よりおくに音する  
は、ほこれの海のおしの白な  
み

千 陸

いろくづ 魚類。

さけ 放つ意。

おぼしま 關干。

瑞枝 ミヅエ。みつくし  
き枝。若枝。

たこしへなし たさへのな  
きこと。比ぶるものなき  
こと。

は、もろこしの西の湖さかいふめる處のさまかけるかたに

似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のほひさへなつかしく

見ゆ。あるじは吾が國ぶりの歌つくり、書見ることをしも好

めるが上に、ここの國の書をさへに晨夕べの友とせりければ、

さるかたの友垣にも乏しからず。唐歌好める何がしの博士

は、さにぬりの小舟に唐少女載せてこの花折らせまくおも

ひ、日の入る國のますらをの法に心をよするは、これぞこの

上の品のうてな生まれ出でたらむ心地する。なごいひあ

へりけり。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の友と見るべき

花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間に響きわたれば、  
盛りに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりた

西の湖 西湖のこと。

さにぬり、にぬりのこと。  
丹塗。赤色に塗りたる。

日の入る國のますらをの  
法 印度の佛教のこと。

上の品のうてな 極樂往生  
を上品・中品・下品の三に  
分つ。即ちその上品の蓮  
の座をいふ。

よび出づ うめき出す。  
苦吟す。よぶ一はうめ  
く、うなる。

もだもあらず 「もだ」は黙  
してある意。だまつても  
あられす。

入相の鐘 イリアヒのカ  
ネ。夕暮の鐘。

しのぐ わけて行くこと。  
透して行くこと。

ふゝむ 含むこと。つばめ  
るさま。

るもあはれ深かるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもこむるものをこて、人々あかれ歸りぬ。(加藤千蔭「うけらが花」)

蚊遣火

晝のほごの暑けさは水の上さへ無徳にて、いご耐へ難かりしを、やうく日影も傾きて、木の問よりそよぎ出づる風

躰筆 足廣島中

のいご涼しきに、ゆあみなごして立ちいづれば、月の影さへほのめきて、晝の苦しさもかつく、わすられぬや、遠くゆくほご、道の傍なる賤が伏屋より烟のいごしげたち上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きな火桶に何にかあらむ、青やかなる木の葉をいご多くさし入れて、こなたかなた

あかれ 別れの意。  
加藤千蔭 國學者。枝直の子。芳宜園と號す。賀茂眞淵に従ひて學び、古言に精しく、又和歌をよくす。文化五年歿す。年七十五。無徳 ムトク。かひなきこと。無益。

曉郭公  
ほと、ぎす一聲たかくなるなり夏のよ今や明けむとすらむ 廣足  
かつく 辛うじて。わづかに。  
賤が伏屋 シツがフセヤ。自分の軽きもの小さく低き家。  
ふすぶる くすぶる。焚く。

にあふぎちらすは、いごあつかはしく、見る目もいぶせくて、急ぎ歩みすぎて見れば、やうく薄らぎゆくけぶりの杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしきにかはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にも晝かまほしき景色になむ。

(中島廣足「檀園文集」)

大臣と稱すれども隨身、舍人もしたがへず。降魔の靈驗ありながら鎮座せる社も見えず。顔に手足に、朱をそゝぎて、披身を執つて振りまはす。もしなま酔かと思へば、柏餅を引窓からぞく下戸か上戸かわくべからぬ文武兼備の進士の垂迹。げにちはやふるかみ幟、あふげばいよく、軒にたかし。  
鬼すまぬわがおほ君の國なれば、鍾馗の劔のぬきがひもなし。(六樹園飯盛「鍾馗の贊」)

あつかはし 熱苦し。  
いぶせし 氣のふさぐ。  
こさ。心の暗れぬこと。  
かはほり 蝙蝠。かうもり。

中島廣足 國學者。熊本藩士。檀園と號す。本居大平の門人。文久四(二五二四)年歿す。年五十一。

六樹園飯盛 國學者。本名石川雅望。通稱五郎兵衛。江戸の人。宿屋を業とす。國文和歌に通じ、狂文狂歌をよくす。晩年武州府中に居る。文政十三(二四九〇)年歿す。年七十八。

一七 心の置處

伊藤一刀齋景久といへば、一刀流の開祖であるから、斯道の人でなくても、大方は知つてゐると思ふ。全國を武者修業して歩いて、名ある人ご技を闘はせること前後三十三回、唯の一度も敗を取つた事がないといふ劍道の達人である。或時<sup>時</sup>遍歴の途すがら、一刀齋は上總の國にやつて來た。そこに劍槍に巧みな神子上典膳といふ士がゐた。一刀齋が來たといふので、早速試合を申込んで來た。然し、立合つて見るに、典膳はもとよりその相手ではなかつた。そこですぐに一刀齋の弟子となつた。これが後に一刀流を大成して世に弘めた小野二郎右衛門忠明の前身である。

忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に従つて全國を武者修

伊藤一刀齋 劍客。初め彌五郎と稱す。名は景久。伊豆國の人。鐘巻自齋に就いて劍法を學び、遂に一刀流を大成す。諸國に周遊して、試合をなすこと三十三度、一人も其の技に及ぶものなしと稱せらる。その終る處を知らず。

神子上典膳 ミコガミテンセン。劍客。名は忠明。上總の人。伊藤一刀齋に従ひて、その技を承け、遂にその蘊奥を極む。後徳川家康に召されて隨身し、小野二郎右衛門と稱す。寛永五(二二八)年歿す。

業して歩いた時分の話である。一日、典膳は師匠に極意を訊ねた。すると一刀齋は、

「別に極意といふほどのものはない。たゞ油斷をしないのが第一だ。」といつた。そして稽古をしてくれるといふことは殆どなかつたが、坐つて居る時でも、歩いて居る時でも、典膳に少しの油斷でもあると、容赦なくほかり／＼と撲りつけた。

或時、典膳が飯を食つてゐると、いつものやうにほかりと來た。しかし典膳はもう大分修練が積んでゐたから、來たな。と思ふや否や、びたつと箸で受止めてしまつた。

「大分修業が出來て來たな。そのくらゐ油斷しないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながら褒めた。

此の時ばかりは典膳も實に嬉しかつた。いつも撲られ通

しで、痛い目ばかり見せられてゐたのに、始めて師匠から褒められたのだから、彼は本當にほつとした。

「お蔭を持ちまして……」彼は恭しく師匠の前に頭を下げた。すると忽ち「ほかりこやつつけられた。」

「また油断を始めたか……」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ處に心を置けば、敵を切らんと思ふ處に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ處に心を置けば、切られじと思ふ處に心を取らるゝなり。」(中略)

我答へて曰く、何處にも置かねば、我が身に一はいに行

我こゝにては深庵禪師。

渡りて、全體に延び擴りてあるほごに、手のいる時は手の用を叶へ、足のいる時は足の用を叶へ、目のいる時は目の用を叶へ、そのいる處々に行渡りてあるほごに、そのいる處々の用を叶ふるなり。萬一もし一處に定めて心を置くならば、一處に取られて用は缺くるなり。思案すれば思案に取らるゝほごに、思案をも分別をも残さず、心をば總身に捨ておき、處々に止めずして、その處々にあつて用を外さず叶ふべし。心を一處に置けば、偏に落つるこいふなり。偏こは一方に片付きたる事をいふなり。(中略)

たゞ一處に止めぬ工夫、これ皆修業なり。心は何處にも止めぬが眼なり、肝要なり。ごつこにも置かねば、ごつこにもあるぞ。心を外へやりたる時も、心を一方に置けば、九方は缺くるなり。心を一方に置かざれば、十方にあるぞ。」

これは澤庵禪師が禪劍一如の妙趣を、柳生但馬守宗矩に垂示した不動智神妙錄の中から抄出したものである。

油斷といふのは心のうつろになることではない。心が一方にさられることをいふのだ。兎角人は刀を手にするに、刀に心を奪はれる。學問をするに學問に心を奪はれる。褒められると褒められたでいゝ氣になる。それが油斷である。

「油斷するな。」

「心をどこにもおくな。」

まるであべこべの言ひ方だ。(山本有三「途上」)

をさまれる御代のまもりの梓弓ひきなゆるめそのものゝふのみち (村田春海)

澤庵禪師 禪僧。但馬國の人。徳川秀忠武藏國品川に東海寺を創設して、其の第一世たらしむ。正保三(一三三〇)年寂す。年七十三。  
柳生但馬守 劍客。大和國の人。宗殿の子。徳川家光に劍道師範として仕ふ。正保三年歿す。年七十六。  
不動智神妙錄 一卷。澤庵禪師の著。柳生但馬守へ贈りたる書なり。

山本有三 劇作家。名は勇造。明治二十年栃木縣に生まる。東京帝國大學獨文科の出身。現に早稻田大學講師たり。

### 一八 米國の半面

歐洲舊國の羈絆をふり棄て、大西洋の彼方、未見の新世界に憧れて、そこに自己の信仰と努力とに依つて、地上樂園を建設せんとして移住した百二人の清教徒は、大なる理想家であつた。併し彼等は唯夢幻の國に儂い理想の影を追ふ様な浪漫主義者ではなかつた。彼等が浪漫的な半面には、實行の世界、現實の生活に於ける絶えざる努力があつた。彼等は終始一貫して、信念と實行とを結び附けなければ止まない奮闘の人であつた。最初新世界に移住して來たその年の冬、凜烈なる寒氣に惱まされて、彼等の多數は命を殞した。それにも屈せず、僅な生存者は、生活の爲の悪戦苦闘を續け、その子孫は爾後二三世紀を出でずして、先住の民を逐ひ、佛蘭西

羈絆 キハン。きづな。東  
新世界 南北亞米利加大  
陸。  
地上樂園 理想の樂園。理想郷。  
清教徒 セイケウト。西曆一五五八年團結したる新教徒の稱。  
浪漫主義者 ラウマンシュギンヤ。空想的のことに興味を持つ人々。

その年 西紀一六二〇年。

先住の民 亞米利加印度人。



人と蘭人を同化し、西班牙人を驅逐し、遂には祖國たる英國の羈絆をさへ脱するの偉業を成就した。此の如きは、一民族の活動の歴史として實に驚くべき奇蹟ではないか。古代、中世、近代を通じて、世界史上未だ曾て比倫を見ざる大業である。云つても過言ではなからう。そして、能く之を爲し遂げたものは、強烈なる宗教的色彩を帯びた理想主義に伴なへる清教徒の物質的努力と、現實主義の精神とに外ならぬのであつた。

アングロサクソンの移住民が、十七世紀の昔に祖國から齎して來た古いものが、星移り物變る三百年の間に、いつか本國の英國では滅びて、却つてそれが米國に遺つてゐるのはおもしろい。言語の上などにも、英國では今日既に廢れた古い語法が、今の米人の日常語の中に用ひられてゐるもの

○比倫 ヒリン。たぐひ。比も倫もともにたぐひ。

歌謡 蘇王をして  
うたふ歌  
仙人リ木を仰りて  
す人  
桃花源より出たもの  
仙境

もある。米國の片田舎の山奥に、今も猶聞かれる樵夫の歌の中に、蘇蘭や英蘭の古い歌謡があるといふ話だ。此等の歌も英國の仙人は今では歌ふまいと思ふ。北カロライナ州から西の方テネッシー・ケンタッキー州に亙る一帯の山岳重疊の地方には、十七世紀頃から近頃まで、殆ど二百萬の移住民が他との交通少く、恰も桃源郷のやうに隔離されて孤立の状態にあつた。このあたりでは、特に英國の古謡が最も多く口から口へ語り傳へられて現存し、またチヨーサー時代の言葉で、本の英國では廢語になつてゐるものが、今も日常語に用ひられてゐる例が多いと聞いてゐる。米國の黄金文明の影に、十七世紀以前の古い英國が在ることを思はなければ、あの大きな謎の國を理解することは出来ない。

私がボストンの郊外に居た時、或日、コンコードの地に哲

蘇蘭 スコットランド。英國本國の北部の稱。  
Scotland.  
英蘭 イングランド。同南半部の稱。England.  
北カロライナ 米國中部の州。大西洋に面す。  
North Carolina.  
テネッシー 北カロライナ州の西に隣す。Tennessee.  
ケンタッキー テネッシー州の北に隣す。Kentucky.  
桃源郷 タウケンキヤウ。世間離れしなる別天地。  
チヨーサー 英國の詩人。ロンドンに生まる。宮廷の近侍となり、轉じて外交官となる。近世英國詩壇の祖と仰がる。(一三四〇?—一四〇〇年)  
Z.Chaucer.  
ボストン マサチューセツツ州の首府。Boston.  
コンコード ボストンの西北なる一邑。Concord.

俗人  
俗人

人エマーソンの舊居を訪うた。友が示す案内記に、コンコードは獨逸のワイマーや、英國のストラトフォード・オン・エイヴォンほどに俗化しては居ない。とあるのを讀んで、さすが見物嫌ひの私も心を動かされたのであつた。青葉の蔭なつかしき五月の半ば、昔清教徒が耕した麥隴、菜畝の間を行く。ここ數里、コンコードのこある旗亭に憩ひ、所謂新英州の質素を想はせるやうな田舎料理を味はつて後、綠滴る美しい森の木の間を流れる小川の畔に、古風な馬車を走らせた時ばかりは、俗な米國にもこんな處があるのかと思つた。そして、世界を動かした思想家エマーソンの家を見、森林生活の讚美者ソーローが筆を執つた池のあたりを逍遙し、去つて小山のほごりにホーソーンの墓に詣でて、私は楽しい夢のやうな半日を過した。市俄古や紐育や華盛頓は、僅に米國の

一五〇  
エマーソン 米國の哲學者。ボストンに生まる。ハーヴァード大學の出身。始め牧師たりしが、後辭し、コンコードに住居して専ら著作に従ふ。(一八〇三—一八八二年)  
R. W. Emerson.  
ワイマー 獨逸中部の都會。ワイマー公國の首都にして、獨逸の大詩人ゲーテ此の地に住せり。  
Wether.  
ストラトフォード・オン・エイヴォン 英國の中部エイヴォン川に臨む小村。英國の劇詩人シェイクスピア此の地に住せり。  
Stratford on Avon.  
麥隴 バクロー。麥畑。  
旗亭 キテイ。料理店。  
新英州 米國大西洋岸北部諸州の稱。ニュー・イングランド。New England.  
ソーロー 米國の文學者。コンコードに生まる。  
ハーヴァード大學の出身。自然を友としてコン

一面を語るものに過ぎない。ボストン郊外のケンブリッジ・コンコード、さては又清教徒に最も縁の深いセイレムの町などを訪ねて、始めて米國文明の奥に潜める理想主義の面影を見るここが出来るのだと、私はその時にしみじみ感じた。(厨川白村「印象記」)

食物は如何にも人體の營養のために攝るものである。然しそれが果して食物の食物たる全意義であらうか。若し蛋白質がいくら、澱粉がいくら、都合何百カロリーの熱を發する故にこれを食ふといふのなら、食物は日々勞働し運轉して妻子を養つてゐる一種の機械に注す油に過ぎない。然し人間が人間であつて、單なる機械ではない以上、食物を攝るにも、それを味はつて食べるといふことが重大な意義を持つて來なければならぬ。こゝに藝術生活の片鱗が見える。(厨川白村)

一五一  
コンコードの地に住み、筆硯に親しみたり。(一八一七—一八六三年)  
H. D. Thoreau.  
ホーソーン 米國の小説家。マサチューセツツ州セイレムに生まる。ボストン大學の出身。出でて官途に仕へることありしも、一生の大半は文筆を友としたり。(一八〇四—一八六四年)  
N. Hawthorne.  
市俄古 ミシガン湖に臨む都會。Chicago.  
ケンブリッジ Cambridge.  
セイレム マサチューセツツ州の一邑。Salem.  
厨川白村 文學博士。名は辰夫。京都の人。東京帝國大學英文科の出身。京都帝國大學教授たり。大正十二年歿す。年四十四。  
カロリー 熱量の單位。一グラムの水を攝氏の一度だけ暖むるに要するもの。Caloric.

一九 月雪花

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を隠して、大小の有象無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を隠して、大小の有象無象悉く照破される光景であるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の分別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴はない清涼の光である。皎潔無垢崇美と稱ふべき優しい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感じる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦

煌々 クワウク。ひかり  
玲瓏 レイロウ。明かなる  
貌。  
赫々 クワクク。盛んな  
る貌。

萬象 バンシヤウ。一切の  
萬物。

皎潔 ケウケツ。しろく  
さきよきこと。

油然 イウセン。雲の盛ん  
なる貌。從つて物の盛ん  
なる貌。

を忘れる。熱國の椰子の蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人心の胸懷に沁みわたることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。うちむかふ月は一つの影ながら浮かぶは千々の思なりけり。である。



芳賀 東西古今、喜悲苦悶の情熱は幾  
萬回となく、幾億回となく、此の光  
一に向かつて、愬へられた。之を嗟嘆

し、之を吟詠した詩歌の感吟は、世

界各國の言語に充ち満ちて居る天文學者は曰ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。此の冷たい光が古往今來、どれほどの暖かみを人間に與へたか。又現に與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

うちむかふ云々 荷田蒼生  
子の歌。蒼生子(タミコ)  
は春満の女なり。女流歌  
人として名あり。

衛星 エイセイ。天文學に  
いふ語。遊星に附屬して、  
その周圍を回轉運行する  
星。自ら光を發せず。太  
陽の光線を反射して輝  
く。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、其の純潔な色を以て乾坤を一つにする。こゝは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや、花ならば咲かぬ梢もまじらましましなべて雪ふる。こいふやうに、眼に入る者すべて其の下に包まれてしまふ。三千世界銀成色、十二樓臺玉作層の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白の色に比べては、地上の花も甚しく汚く感ぜられるのである。霏々ご散り、紛紛ご飛んで、唯一條の川水を殘して、山こいはず、野こいはず、瞬く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいこいふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々の眺は元より美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色も、目の

花ならば云々 新續古今集卷十七雜歌上に見えたる權律師仙覺の歌に「花ならば咲かぬ梢もまじらましましなべて雪ふるみ吉野の山」  
三千世界云々 淵鑑類函卷九天部九雪の條に見えたる宋の僧劉師道の句。「三千世界」は宇宙全體の義。「十二樓臺」は仙人の居るところ。  
廣寒宮 クウカンキウ。月のみやこ。月宮殿。

覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉も無い冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に蔽はれるのは、眞に對照の妙變化の奇造化の巧を悉したものである。一年中蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど楽しいものではない。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、これを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてあまりに贅澤な感じもする。花は其の美しい色の外に、芳しい匂さへ有つて居る。我等の食用のために作った菜や大根や、どの花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、

一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、これほど寂寞  
 を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に  
 一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、其の濫用を  
 慎んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を  
 供へる。人は死後まで花を離れぬのである。月雪の眺は、其の  
 皎潔を愛し、其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗華美を以て人  
 生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々しい、華  
 美華麗華奢等の語は、皆花に基づいたものである。今古東西  
 の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯花をし見れば物思も  
 なし。といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信ずる。  
 月雪花三つの眺は、各其の特長がある。いづれを前、いづれ  
 を後といふことが出来ぬ。

山ざくら花の下風吹きにけり木のもごごこの雪の

棺槨 クワンクック。槨は  
 棺の外郭。

花やぐ 花やかになるこ  
 ごと。

花をし云々 古今集卷一春  
 歌上に藤原良房の歌とし  
 て「年ふれば齢は老ひぬ  
 しかはあれど花をし見れ  
 ば物思もなし」

山ざくら云々 新古今集卷  
 二春歌下に見えたる康資  
 王の母の歌。

むらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春に  
 やあるらむ

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪鞋は香ばし楚地の花、肩上の笠に  
 は無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。花を賞して月を愛  
 せぬ人は無い。月花を愛して雪を愛でぬ人も無い。

想へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷  
 雪に鎖されてゐる北極に近い地では、氷は即ち人の家であ  
 る。此の地方の人は寸紅の目を楽しませるものも無い。又こ  
 れに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて

冬ながら云々 古今集卷六  
 冬歌に見えたる清原深養  
 父の歌。

笠は重し云々 謡曲葛城の  
 一句。なほ詩人玉屑に  
 「笠重吳天雪。靴香楚地  
 花」の句あり。

生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇観は見た事がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が昔も今も此の三つの眺を恣にするこゝを得るのは、眞に天賦の幸福では無いか。

月雪花の眺は古人の歴史が加つて一層の感興が増す。世を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。月は古來の歴史を照らす鏡である。年々歳々花相似、歳々年人不同。鬢の霜頭の雪、人生の感は花を見て益々繁く、雪を見ていよいよ多い。二千五百年來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

(芳賀矢一「月雪花」)

世々を經て 伊藤仁齋の歌。

年々歳々云々 唐の劉廷芝の「一代悲白頭翁」と題する詩の一句。

芳賀矢一 文學博士。福井縣の人。東京帝國大學國文科の出身。永く母校に教授を勤め、後國學院大學長たり。昭和二年歿す。年六十一。

語彙

- 一 本表は特に注意すべき語彙を輯め、之を品詞別に於て、五十音順に配列した。  
 本書の語彙によつてその言語作用を研究せんには、各語の下に記せる頁數により、本文に對照し、且別掲の如き種々の辭書を活用して、その各語の本質を考察すべきである。
- 三 辭書の使用に際しては、左の諸點に留意して學習帖に記入せられたい。
- イ 字劃  
 ロ 音・調  
 ハ 原意義  
 ニ 轉意義  
 ホ 熟語  
 ヘ 同音語  
 ト 同意語  
 チ 對照語  
 リ 語格

名詞	ア行	有明	印象
哀婉	アイエン。	アリアケ。	インシヤウ。
萬然	アイゼン。	アンジ。	インジュン。
赤絨	アカオドシ。	イイク。	インシン。
闕伽棚	アカダナ。	幽雅	因循
朝餉	アサガレヒ。	イウガ。	インメツ。
淺芽生	アサヂフ。	幽玄	憂名
あし	五六三	イウゼイ。	ウキメ。
葦毛	アシゲ。	異境	憂目
朝臣	アソン。	いさかひ	ウキセ。
梓弓	アツサユミ。	意識	うたかた
壓迫	アツ、パク。	いたはり	うき世
あて人	五六三	一本御書所	うたかた
あはれ	五五四、五五七、五八五、五八七	イッポンゴ	うたかた
阿附黨同	アフタウドウ。	シヨドコロ。	うたかた
押領使	アフリヤウシ。	いなめ	うてな
荒海の障子	アラウミの	悵鬱	産土の神
シャウジ。	五二〇	イフウツ。	ウブスナのカ
		家の子	ミ。
		イへのコ。	上の衣
		イマヤウ。	ウへのキヌ。
		イリアヒ。	上の品
		いろくづ	ウへのシナ。
		陰影	うまびと
		インエイ。	占形
			ウラカタ。
			うるほひ
			五九〇

溫明殿	ウンメイデン。五二三	御曹司	オンザウシ。五八三	恰當	カフタウ。六五九	機微	キビ。六二九
永遠	エイエン。五八九	御衣	オンゾ。五六七	鑷	カブラ。五八〇	きびは	五八二
永劫	エイゴフ。六四五	御行	カイテウ。六二九	紙子	カミコ。六七五	岌々	キフ〜。五二二
要領	エウリヤウ。六九三	諧調	カウガ。六六〇	駕輿	カヨチヤウ。五二九	儀表	ギヘウ。六三三
輿義	オウギ。六三三	傲岸不遜	ガウガンフソ。六二七	唐櫃	カラウド。五五一	歸命	キミヤウ。六三三
おきて	オキテ。六六六	ン。	六二七	がり	カンカ。六二〇	竟寔	キヤウエン。五六四
音信	オトヅレ。五〇三	抗議	カウギ。六三三	侃譁	カンガク。六三三	境遇	キヤウグウ。五三三
おとゞ	五六一	考察	カウサツ。六二九	閑却	カンキヤク。六三三	境地	キヤウチ。五五
おどろ	五五九	柑子	カウジ。六四八	閑寂	カンジヤク。五二六	穹窿	キユウリュウ。五八七
おぼしま	五三六	高足	カウソク。六三四	感受性	カンジュセイ。六六七	局限	キョクゲン。六二四
追手	オフテ。五八〇	餓鬼道	ガキダウ。五〇一	感觸	カンショク。六二九	金城	キンジャウ。六二七
大手	オホテ。五八〇	角逐	カクチク。六三〇	簡素	カンソ。五九	公卿	クギヤウ。五二六
大荒目の鏡	オホアラメ。五二七	鹿毛	カダ。五八八	上達部	カンダチメ。五九七	公卿會議	クギヤウセン。五二六
のヨロヒ。	五二七	かさし	六七六	神無月	カンナヅキ。六四八	ギ。	五二六
覺束なさ	オボツカナさ。五〇〇	霞の洞	カスミのホラ。五六	犠牲	ギセイ。六九〇	楯形の穴	クシガタのア。五二二
大庭	オホニハ。五二八	片岨	カタソバ。五二一	奇蹟	キセキ。五〇五	具象	グシヤウ。六五七
大政所	オホマンドコロ。六二四	葛藤	カツトウ。六二九	北の方	キタのカタ。五八五	具足	グソク。六五五
		かはほり	五二四	城戸	キド。五三三	くだかけ	六四七
大わだ	五二七	土器	カハラケ。五六七	羈絆	キハン。五二七	口ずさむ	五三九

究竟	クツキヤウ。六三三	皎潔	ケウケツ。五二二	候人	コウジン。五五〇	齋院	サイイン。五二四
國ぶり	五二九	教養	ケウヤウ。六二二	洪大	コウダイ。六三三	宰相	サイシヤウ。五二七
供養	クヤウ。五二九	外記	ゲキ。五二六	構圖	コウヅ。五七四	宰相	サイシヤウ。五二七
栗毛	クリゲ。五八三	缺焉	ケツエン。六三九	後天	コウテン。六四二	裁斷	サイダン。六二八
黒戸の御所	クロドのゴ。五二二	協調	ケフテウ。六二八	降魔	ゴウマ。五二四	造化	サウクワ。五二五
シヨ。	五二二	下薦	ゲラフ。五六一	極意	ゴクイ。五二四	錯覺	サクカク。六二七
懷疑	クワイギ。六二二	界限	ゲンカイ。六二八	國粹	コクスピ。六六	さざれ浪	五二七
廣寒宮	クワウカンキウ。五二四	幻覺	ゲンカク。六八	小具足	コグソク。五八五	蹉跎	サタ。六三三
荒儀	クワウギ。五二九	玄鑿	ゲンカン。五五五	御幸	ゴコウ。五五九	嗟嘆	サタン。五二五
曠劫	クワウゴウ。五二九	元々	ゲン〜。六三三	心ばへ	五三	雑色	ザツシキ。五二六
恍然	クワウゼン。五二四	乾坤	ケンコン。五二四	痼疾	コソツ。五二五	さびぬり	五二九
華奢	クワシヤ。五二六	見參	ケンザン。五二〇	小葩	コジトミ。五二〇	左府	サフ。五二四
觀察	クワンサツ。六二八	見參の板	ゲンザンのイ。五二〇	後世	ゴセ。五〇八	雜人	ザフニン。六四九
官人	クワンニン。五〇四	タ。	五二〇	姑息	コソク。六二八	雜兵	ザフヒヤウ。五二二
觀念	クワンネン。五二二	現實	ゲンジツ。五二四	糊塗	コト。六三一	嶋巖	ザンガン。五二二
玩味	グワンミ。六二八	現象	ゲンシヤウ。六九〇	こと國	五二九	懺悔	ザンゲ。六五八
經驗	ケイケン。五四	見地	ケンチ。六二八	ことわり	六四九	三尊	サンゾン。六八〇
系統	ケイトウ。六二八	元服	ゲンブク。五五九	劫火	ゴフクワ。五八〇	收斂	シウレン。六三九
經緯	ケイリン。六四〇	苟安	コウアン。六三三	顧慮	コリョ。五三二	時運	ジウン。六二四
教化	ケウゲ。六三三	恒久	コウキウ。五八九	金剛力	コンガウリキ。五三一	自覺	ジカク。六二二
		公家	コウケ。六四七	金堂	コンダウ。六二七		





キケイカウ。	六二〇
なごやか	五八七
なだらか	五九
なほざり	六九七
ならひ	五五
鳴神 ナルカミ。	五二六
なれ	五二六
女房 ニヨウバウ。	五二三
認識 ニンシキ。	六二九
寧日 ネイジツ。	六二八
涅槃 ネハン。	六二四
野立 ノダチ。	五二一

ハ行

方便 ハウベン。	六二七
放埒 ハウラツ。	五三
はかなさ	五〇六
萩の戸 ハギのト。	五二〇
迫害 ハクガイ。	六三〇
麥秋 バクシュウ。	五〇七
麥隴 バクロウ。	五二五〇
藐姑射の山 ハコヤのヤマ。	五三三
跋扈 バッコ。	六三六
はなむけ	六七五
埴安 ハニヤス。	五二七
脚巾 ハッキ。	五五
破目 ハメ。	六二
腹巻 ハラマキ。	五二六
腹帯 ハルビ。	五八四
半可通 ハンカツウ。	六三三
反感 ハンカン。	六八八
萬象 バンシャウ。	五二五
萬姓 バンセイ。	六四
判断 ハンダン。	六二九

判定 ハンテイ。	六二九
諺解 ビウカイ。	六二九
裨益 ヒエキ。	六二六
聖 ヒジリ。	五六
混甲 ヒタカブト。	五七五
直垂 ヒタタレ。	五二七。六五
ひたぶる	六九
肘木 ヒヂキ。	六三五
畢竟 ヒツキヤウ。	六二七
批評 ヒビヤウ。	六二八
比喩 ヒユ。	六五九
比倫 ヒリン。	五二四八
火桶 ヒラケ。	五二四〇
敏感 ビンカン。	六八七
便宜 ビンギ。	六五四
鬢 ビンヅラ。	五五五
風儀 フウギ。	六四七
風騷の人 フウサウのヒト。	六七六
風塵 フウビ。	六三六
風流 フウリウ。	六二七

扶桑 フサウ。	六七六
船津 フナヅ。	五九九
不便 フビン。	五八四
吹雪 フマキ。	五三七
書始 フミハジメ。	五五八
不用 フヨウ。	六八一
文化 ブンクワ。	六六二
文藝 ブンゲイ。	六二九
文献 ブンケン。	六二九
分別 フンベツ。	五二四五
弊害 ヘイガイ。	六二三
平蕪 ヘイゴ。	五一〇
苗裔 ベウエイ。	五五五
表現 ヘウゲン。	六二七
表情 ヘウジヤウ。	六二九
標準 ヘウジュン。	六二二
通歴 ヘンレキ。	五二四二
反古 ホウゴ。	六五五
封人 ホウジン。	六八一
朗か ホガラカ。	五八七
木鐸 ボクタク。	六二三

歩趨 ホスウ。	六二七
捕捉 ホソク。	五七〇
菩提 ボダイ。	五二〇八
ほのか	五二五
法施 ホフセ。	六二七
本念の命 ホンネンのイノチ。	五二七
煩惱 ボンノウ。	六二四
本能 ホンノウ。	六二

マ行

みやびを	五四九
魅了 ミレウ。	五七三
無慙 ムザン。	五八六
矛盾 ムジュン。	六二〇
無徳 ムトク。	五二四〇
盟主 メイシュ。	六二九
冥府 メイフ。	六八
名利 メイリ。	六四〇
馬手 メテ。	五二五
傳 メノト。	五二六
乳母子 メノトゴ。	五二六
面目 メンボク。	五七六
瘡 モガサ。	五二〇五
模糊 モコ。	六二四
物具 モノ、グ。	五八五
ものゝふ	五二四
もろこし	五三九
唐船 モロコシブネ。	五九
文殊 モンジュ。	六五八

ヤ行

矢合せ時 ヤアハセドキ。	五七九
屋形 ヤカタ。	五六
薬研 ヤゲン。	五二二
野人 ヤジン。	六二
矢束 ヤタバネ。	五八〇
矢束 ヤツカ。	五二五
矢つぎばや	五二五
山がつ	六七〇
遺戸 ヤリド。	六二
ゆあみ	五一四〇
ゆかり	六二
油断 ユダン。	五二四
ゆはた	五二八
ゆふげ	五二四
弓手 ユンデ。	五二五
壅塞 ヨウソク。	六二〇
豫想 ヨサウ。	六二六
夜のおと	五二二
鏡の引合せ ヨロビのヒ	五七
キアハセ。	五七

ラ行

郎従 ラウジユウ。	六四四
郎等 ラウトウ。	五二六
洛 ラク。	六八
埒 ラチ。	六四九
嵐氣 ランキ。	五二〇
亂臣 ランシン。	六四四
理解 リカイ。	五二四九
理想 リサウ。	五二四七
立脚地 リツキヤクチ。	六二八
律呂 リツリヨ。	六五
陵夷 リョウイ。	六三四
旅情 リョウヂヤウ。	五九〇
綸言 リンゲン。	五二六
臨終正念 リンシュウシヤ	
ウネン。	五二〇七
流入 ルニン。	五八八
令聞 レイブン。	六三四
玲瓏 レイロウ。	五二五
浪漫主義 ローマンシユ	

ギ。 五二七  
六根 ロクゴン。 六六

ワ行

王佐の才 ワウサのサイ。 六三  
王土 ワウド。 六四  
王法 ワウハフ。 五二  
わざ わざ。 六九  
渡殿 ワタドノ。 五六  
童 ワラハ。 五九  
わらふだ 五三  
院司 キンシ。 五二  
衛府督 エフノカミ。 五二  
舅 ナヂ。 五二  
をのこ 五六

あらがねの 五二  
石の上 イソのカミ。 五二  
いなめのめ 六二  
さだなみや 五七  
敷島や シキシマヤ。 五三  
白たへの 五三  
たらちねの 五三  
ちはやふる 五二

形容詞

あさまし 五四  
あたらし 五四  
あつかはし 五四  
あまねし 五五  
あやし 五六  
あやなし 五六  
いとほし 五二  
いぶかし 五二  
いぶせし 五二

いみじ 五五  
うたてし 五五  
うつくし 五五  
うとし 五五  
うれはし 五五  
覺束なし オボツカなし。 五五  
かしまし 五五  
かそけし 五五  
かなし 五五  
けし 五五  
國際的 コクサイテキ。 五五  
心憂し コ、ロウシ。 五五  
心憎し コ、ロニクシ。 五五  
心もとなし 五五  
さうくし 五五  
さかし 五五  
さやけし 五五  
しどけなし 五二

枕詞

蘆がちる 五二  
梓弓 アヅサユミ。 五二

あたらし 五四  
あつかはし 五四  
あまねし 五五  
あやし 五六  
あやなし 五六  
いとほし 五二  
いぶかし 五二  
いぶせし 五二

によぶ 五二  
ぬかづく 五二  
宣ふ ノタマふ。 六四  
はかなくなる 五二  
はぐくむ 五二  
花やぐ 五二  
はふる 六九  
侍る 五五  
不孝す フケウす。 五二  
ふすぶる 五二  
ふたためく 五二  
ふくむ 五二  
ほのめく 五二  
まうづ 五二  
まがふ 六九  
罷る マカル。 五二  
まぎる 五二  
まします 五二  
まろぶ 五二  
參らす マキラス。 五二  
みそなはす 六二

めでたし 五九  
やむごとなし 五二  
ゆかし 六二  
ゆよし 五二  
よしなし 五二  
よそくし 五二  
浪漫的 ロマンチック。 五二  
煩はし ワツラはし。 五二  
わりなし 五二  
をかし 六二

おとなふ 六二  
おはします 五二  
おはす 五二  
思召す オボシメす。 五二  
おぼす 五二  
思す オボす。 五二  
およす 五二  
およろ 五二  
影るふ 五二  
かた敷く 五二  
かづく 五二  
消入る キエイる。 五二  
きこしめす 五二  
くつろぐ 五二  
膾炙す クワイシヤす 五二  
擧る コゾる。 五二  
ことさむ 五二  
さうどく 五二  
さがる 五二  
さしもどく 五二  
さすらふ 五二  
さばく 五二

動詞

あかる 五二  
憧る アコがる。 五二  
あざむ 六二  
一座す イチザす。 五二  
失す ウす。 五二  
春く ウスづく。 五二  
うらぶる 五二

候ふ 六二  
さまよふ 六二  
したくむ 六二  
しのぐ 六二  
知らす 六二  
しろしめす 六二  
しわる 六二  
すさぶ 六二  
すさぐ 六二  
ずん流る 六二  
組織立つ ソシキダつ。 六二  
関ぐ セメぐ。 六二  
たうぶ 六二  
ちぎる 六二  
つゐる 六二  
つどふ 六二  
とうづ 六二  
解きさく 六二  
どよもす 六二  
なづむ 六二  
なまめく 六二

にやぶ 五二  
ぬかづく 五二  
宣ふ ノタマふ。 六四  
はかなくなる 五二  
はぐくむ 五二  
花やぐ 五二  
はふる 六九  
侍る 五五  
不孝す フケウす。 五二  
ふすぶる 五二  
ふたためく 五二  
ふくむ 五二  
ほのめく 五二  
まうづ 五二  
まがふ 六九  
罷る マカル。 五二  
まぎる 五二  
まします 五二  
まろぶ 五二  
參らす マキラス。 五二  
みそなはす 六二

によぶ 五二  
ぬかづく 五二  
宣ふ ノタマふ。 六四  
はかなくなる 五二  
はぐくむ 五二  
花やぐ 五二  
はふる 六九  
侍る 五五  
不孝す フケウす。 五二  
ふすぶる 五二  
ふたためく 五二  
ふくむ 五二  
ほのめく 五二  
まうづ 五二  
まがふ 六九  
罷る マカル。 五二  
まぎる 五二  
まします 五二  
まろぶ 五二  
參らす マキラス。 五二  
みそなはす 六二

むせぶ	五六八	おとなしやかに	五二六
むねとす	六五三	かたみに	六九五
ものす	六五二	かつく	五一四〇
催す モヨホす。	五三三	かりそめに	六七五
やりすつ	六五五	げに	五六一
ゆたふ	五二〇	さしも	五八五
ゆる	五三三	さすが	五三〇
よそふ	五六四	さながら	五〇九
よろぼふ	五二二	さのみ	五六五
をのゝく	六二五	凄じげに	五二三
		たわゝに	六四八
		なか	五五九、六〇八、六九九
		なべて	五三九、六九九
		のろくしげに	五二三
		ひたすら	五三二
		ひとへに	五五八
		まさくと	五九五
		むげに	五六六、三〇
		みながら	六四九、九八
		やうく	五二七、一四〇
		やがて	五五九、九三五、六四四
		やすらかに	五五九、六五〇
		ゆめく	五七五

副詞

あからさまに  
あざやかに  
いかで  
いかでか  
いたく  
いたづらに  
いとゞ  
艶に エンに。

辭書一覽

國語	言海(大槻文彦)	言泉(落合直文芳賀矢一)	廣辭林(金澤庄三郎)	大日本國語辭典(上田萬年松井簡治)	難訓辭典(井上頼國等)	日本外來語辭典(上田萬年等)	漢和	字源(簡野道明)	詳解漢和大辭典(服部宇之吉小柳司氣太)	大字典(上田萬年等)	日本百科大辭典(三省堂)	日本家庭百科事彙(芳賀矢一下田次郎)	古事類苑(神宮司應)	廣文庫(物集高見等)	日本地理	大日本地名辭典(吉田東伍)	帝國地名辭典(天田爲三郎)	日本歴史				
國史大辭典(八代國治等)	姓氏家系辭書(天田 亮)	日本人名	大日本人名辭書(東京經濟雜誌社)	日本人名辭典(附假作人名辭彙(栗島山之助)	國學者傳記集成(天川茂雄)	支那人名	支那人名辭書(難波常雄鈴木行三阜川純三郎)	西洋人名	文藝大辭典(齋藤龍太郎)	神祇	神祇辭典(山川鶴市)	佛敎	佛敎大辭典(織田得能)	佛敎辭林(藤井宣正)	佛敎大辭彙(龍谷大學)	故事熟語	故事成語大辭典(簡野道明)	故事熟語大辭典(池田蘆洲)	和歌	國歌大觀・同續篇(松下大三郎)	俳句	三句俳句大觀(佐佐政二)

新撰俳諧辭典(岩本梓 石宮澤朱明)  
 類分俳句全集(正岡子規)  
 國語  
 國語解題(佐村八郎)  
 國語學書目解題(東京帝國大學)  
 日本文學辭典(三浦圭三)  
 漢籍  
 漢籍解題(桂 湖村)

有職故實  
 有職故實辭典(關根正直加藤貞次郎)  
 宮殿調度圖解附車輿圖解(關根正直)  
 裝束圖解附甲冑武器圖解(關根正直)  
 官職要解(和田英松)  
 故實叢書(今泉定介)  
 雅言  
 雅言集覽(石川雅望)

俚諺  
 諺語大辭典(藤井乙男)  
 俚諺辭典(能代彦太郎)  
 俚言集覽(村田了阿)

格言  
 格言大辭典(芳賀矢一服部宇之吉安井小太郎)  
 動物植物

日本動物圖鑑(丘淺次郎等)  
 植物圖譜(牧野富太郎)  
 日本植物圖鑑(牧野富太郎)  
 哲學  
 岩波哲學辭典(岩波書店)  
 哲學大辭書(同文館)  
 美術  
 美術辭典(石井柏亭)  
 日本書畫骨董大辭典(池田常太郎)  
 日本畫家大辭典(澤田 章)  
 謠曲  
 謠曲辭典(蜂谷時順)  
 能樂大辭典(正田章次郎)

昭和五年 六月 二十三日 印刷  
 昭和五年 六月 二十六日 發行  
 昭和五年 十一月 二十二日 訂正印刷  
 昭和五年 十一月 二十五日 訂正發行

國文選(全十册)

自卷一 至卷四	各金四拾五錢	昭和 五年 六月 二十 三日	自卷一 至卷四	各金六拾八錢
自卷五 至卷八	各金三拾九錢	昭和 五年 六月 二十 六日	自卷五 至卷八	各金六拾八錢
自卷九 至卷十	各金三拾九錢	昭和 五年 十一月 二十二 日	自卷九 至卷十	各金六拾貳錢

編者 垣 內 松 三

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 株式會社 明 治 書 院

取締役社長 鈴木友三郎

東京市神田區雉子町三十四番地

印刷者 綾 部 喜 久 二



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
(振替東京四九九一番)

株式會社 明 治 書 院

電話神田一四一四番

